
これが俺の貴族道

o r o t i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが俺の貴族道

【Nコード】

N1166R

【作者名】

oroti

【あらすじ】

現代で持ち前の背の高さと悪い目つき、言葉遣いで不良と間違えられていた青年がとある神様の手違いで死んじやった！そしてお詫びにゼロ魔の世界へ転生だって？てかゼロ魔ってなんだ？そんな貴族らしくない貴族が色々常識を覆しながら自分の信念を貫いていく話。

この話はゼロ魔が背景の別物になる恐れがありますwそういうのが気に入らない人はバックボタンや閉じるボタンを押しちゃってください。

プロローグ

プロローグ

さて、今俺はとても奇妙なことになっている。

どのくらい奇妙かって言うと360度見渡す限り真っ白の空間に俺1人立っている、いや浮いているって感じた。

たぶん夢だとは思うが、なんとも味気ない夢だ。ただ妙にリアリティあふれていると言うか…。

とりあえず現実逃避に走ろうと思う。何故かって？思い出せる記憶が道路に飛び出した子供を追いかけて捕まえたところで激しい衝撃と浮遊感を感じたからじゃないぞ。違うぞ決して…。

俺は黒羽刃^{くろはじん}東京のごくごく普通の高校に通う2年だ。背は高いがそんなに筋肉質じゃない。顔は…まあ普通だろ。自分でイケメンとか言うほどナルシストではない。

ただ目つきが悪い。これは俺の1番のコンプレックスでもある。この目のおかげで不良共によく絡まれるし先生からは反抗的だといわれることも多々。しかも武術の師範である爺さんから鍛えられていた俺は絡んできた不良を返り討ちにしているせいで、学校内では乱暴者くらいの評価である。正当防衛のはずなんだが…

というか学校の奴らは見る目が無さ過ぎる。確かに口調も雑だし目つきと背のせいで乱暴に見えるかもしれないが、基本俺は不良では

ない。あいつらは俺の外見しか見てないし……………

閑話休題

さて、話がそれたが俺の確認（途中から愚痴だったのは気にするな）ですでに30分ほど経っているはずなんだが相変わらずこの真っ白な空間に変化はない。

ここまでくれば嫌でも自覚してくる。

「あゝ。俺死んだか」

「やゝと気づいたのね」

「あん？」

聞いたことの無い声に振り返って見れば金髪碧眼の女が立っている。どうでもいいが服が真っ白なせいで顔と手だけ浮いてるみたいだな。

「ずっと待つてたのよ。中々あんたが自覚しないから」

「…てかあんた誰？」

「え？この状況だしなんとなく気がつかないかな？ほら美人なめが・み・さ・ま」

…とりあえず目の前にいるとちくるった女をどうにかしようと思うのだがどうしよう。

「む。その顔は信じてないって顔ね」

「当たり前だ。確かにここがどういいう場所か分からんがどう見ても

あんたは人間にしか見えん」

「えゝ？この姿気に入ってるんだけど…信じてもらえないならしかたないっか」

すると、女の体が突然光り始める。思わず顔を覆って光が収まったところで目の前にいたのは、俗に言う観音様のな手がいつぱいある自称女神だった。

「な……」

「これで信じてもらえたかな？」

「わ、分かった。信じた」

俺の答えに満足したのか微笑んだ女神は、また光って最初現れた姿に戻った。

「あの格好って少し不気味じゃない？だからあんまり好きじゃなくって」

この軽い話し方とさっきの姿がどうしても結びつかない俺が、必死で理解しようと頭を悩ませていると、その沈黙を勘違いしたのか女神が本題に入り始めた。

「えゝつとね。んゝ……。回りくどいのがめんどくさ…じゃなかった、理解するの大変だろうから単刀直入に言うね」

「……本音ただ漏れたな」

「貴方に転生してもらったことになったの！」

「はあ？」

あまりに突拍子も無い女神？の言葉に思わず聞き返した俺に対して、女神？はこうなった経緯を話し始めた。

要約すると、人間にはあらかじめ幸運と不運の量が決まっております。俺は今までの人生で不運ばかり使って幸運を使えて無かったとか、普通なら残りの人生で使うはずなんだが今度は目の前の女神？の手違いで本当の寿命を待たずに俺が死んでしまったから、そのお詫びを兼ねて転生って話になったらしい。

あ、どうしてもあの姿と軽い話し方が結びつかなかったから俺の中で女神に？をくつつけることにした。文句は言わせん。

「転生ねえ。まあそれは正直どうでもいいんだが、1つ聞いていいか？」

「どうでもいいって…まあいいわ。何かしら？」

「俺が助けたあの子供、助かったのか…？」

「そのことね。ちゃんと助かったわよ。大きな怪我も無くかすり傷程度で済んでるわ」

「…そうか、よかった」

ずっと気がかりだったことを聞いて安心してしていると女神？と目が合った。すると女神？は突然顔を赤くしてそっぽを向いた。

「なんだ？どうかしたか？」

「な、なんでもないわよ。そ、それよりも転生の話を進めるわよ！」

「？まあいいか。それで、俺はどこへ飛ばされるんだ？」

「ゼロの使い魔って小説の世界よ。小説といってもその物語どおりに話が進むわけじゃないわ。その世界できちんと生きている以上どうなるかは誰にも分からないの」

「ふうん。小説とか読んだことねえからどんな世界なのかさっぱり分かん」

「そうね。時代は中世ヨーロッパってところで魔法があるような世界

ね」

魔法という言葉に少し胸が高鳴る。やっぱりそういうファンタジーな世界に憧れるとこがあったからだ。

「へえ、面白そうだな。で？さっきお詫びとか言ってたしなんか特典みたいなもんがつくのか？」

「目ざといわね。まあそういうことよ。具体的にはそれなりの家庭環境と武術と魔法の才能、あとは記憶の引継ぎくらいかしら」

「時代が中世なんだろ？そんな世界にこの時代の知識を持っていた方がいいのかよ？」

「気にすること無いわ。この世界とは完璧に別物だし、あなたがあつちこつちに広めて回ってもいいわよ？」

「誰がそんなめんどくさいことやるかよ。まあ役立つ知識もあるだろうし、ありがたく貰っていくぜ」

「そうそう、好意は素直に貰っておくものよ。それじゃ今度目覚めるときは新しい親の腕の中でしょうね。素敵な人生を」

その言葉を聞き終わると突然の浮遊感のあと意識を失った。

「やっぱり転生なんかじゃなくって下級神くらいにして彼氏にしちやえばよかったかしら」

実は俺が話していた女神？が、神の中でも頂点に君臨する最高神だったのだが、そんなこと知る由も無い俺だった

第1話

第一話

よお、黒羽刃あらためシュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

あの女神？と話したあと俺の目が覚めたのがこのアールハウト家だった。

とりあえずこのアールハウト家はトリステイン王国に仕える貴族で、公爵に次ぐ地位を持つ侯爵って爵位を持ってるかなりの名家なんだとか。親父はライトハルト・ド・アールハウトって名前ですげえイケメンなのな。俺が1人目の子供ってことでまだ20代、赤い髪と赤い目をしていて、マンティコア隊ってこの隊長なんだって。

母さんがヴィヴィアン・ド・アールハウトって言う名前、結構有名なメイジでヴァリエール公爵家の烈風のカリンって人の一番弟子なんだとか。もちろんすっごい美人、金髪でブラウンの目、スタイルもボン・キュッ・ボンだ。

ちなみに魔法を使う人のことを総称してメイジと呼ぶとか、ちなみに貴族は全員メイジらしい。

日本生まれの俺としては横文字のオンパレードな名前にいまだに現実感が無い。

この2人の子供となった俺が生まれてまだ5年ほどしか経ってないが、あの女神？の言っていたとおりかなりいい親に恵まれたようだ。

ん？生まれてからの5年間はとうした？

…黙れ。精神年齢思春期真っ盛りの俺がどれだけ恥ずかしい思いをしたと…

母さんに抱きしめられるだけでも精神的にまずいのに母乳を飲めだの、おしめをかえましようねだとか…

閑話休題

こんな思い出したくも無いことは放っておいてだ。

あの女神？の言っていたとおりこの世界には魔法なるものがあるらしい。俺の親は火のスクウェアと風のスクウェアだ。ちなみに親父が火で母さんが風な。

ちなみにメイジとしての実力は足せる属性の数で決まるらしく最初がドット次がライン、そしてトライアングル、スクウェアと続く。かくいう俺はというと、すでに火と風のライン、水と土はドットである。水と土まで入ってるのは俺の爺さんと婆さんに水メイジと土メイジがいたからだ。

あの女神？、口調は軽いが力は本物らしい。もう会うこともないかもしれないが評価がかなり上がったぞ。これからは？をとって呼んでやることにする。どっかで『やっと取れたのね！』とかつて声が聞こえた気がするが空耳だな、うん。

さて、こうしてこの世界の常識だとかを5年間で学んできたが、貴族の平民を人と思わないような思考に正直反吐が出そうだ。このアールハルト家ではそんなことになってないが、時々呼ばれる貴族同士の付き合いで他の領地に行くとそういう理不尽な行動が目立つ。親父達も俺のそんな気持ちに気がついているようで俺が怒りそうに

なるたびに手を握ってくれる。俺も馬鹿じゃない、今はただの子供でしかない俺がその辺の貴族を張り倒したりすれば必ず問題になる。だからいろんな意味で早く力をつけてこの腐った国を何とかしようと決心した。

そういえば俺のことを喋ってなかったな。

まだ5歳だからイケメンかといわれると首を傾げなければいけないが、将来は有望だろうといわれている。まあ親父も母さんも超が付くくらいのイケメンと美人なんだ。あの2人の子供で顔が整わないほうがおかしい。髪の色は親父と同じで赤、目は母さんと同じでブラウン、顔は少し中性的でまだ幼いから女装させられると女の子と間違えられる。最近の悩みは母さんが面白がって俺に女装させることで、最近逃げ足が速くなって来たなと実感しているところ。

でだ。なんでこんな長々と語ったかというと、ぶっちゃけ暇なのだ。今の俺はヴァリエール公爵が主催するパーティに出席するというわけです。馬車で移動中。

もちろん移動しているわけだから馬車から出れない俺にすることなんて無い。PSPとかあればなんとか、ダメな方向へ思考が飛びかけているのかもしれないだろう。

いい加減我慢も限界に差し掛かったところようやくヴァリエール公爵家に着いた。母さんから聞いた話だと俺と同じ年の女の子がいて、更に上に2人の姉がいるとのこと。いくら母さんとの知り合いとはいえ公爵家だからきちんと礼節を守るようにと念を押されて馬車から降りた。

ヴァリエール家の執事さんに案内された大広間ではすでにパーティが始まっているようで華やかなドレスや宝石で着飾った貴族達が集まっていた。

すると奥から美人だがなんともいえない威圧感を持った女性がかっ

ちに向かってきている。

「ああ、ヴィヴィアン来ていたのね」

「これは、カリン様。つい先ほど到着いたしました、わざわざお声をかけてくださって感謝いたします」

「そんなにかしこまらないでいいのよ？軍にいたころはもつと色々言ってくれていたでしょう？」

「あ、あのころのことは忘れてください。若気の至りというやつです」

普段の母さんとは違う一面を見てこれが烈風と恐れられていたカリンって人なんだなとあたりをつける。

そんな視線に気づいたのかカリン様と俺の目が合った。

「あら？この子が今噂の天才。シュヴァルツ君かしら？」

「まあ、天才だなんてとんでもない。ほらシュヴァルツ、ご挨拶を」

「はい。シュヴァルツ・ド・アールハウトと申します。以後お見知りおきを」

俺だっで見境なく雑な口を利くわけじゃないぞ！特にこの人に対しては丁寧に喋らないとやばい気がするんだ…

「堂々としていい子ね。フフ、将来が楽しみな子ね。ちょうどいいわ、娘達を紹介します。ほらあなた達こっちに来なさい」

そついうと少し奥から3人のこれまた美人or可愛い女の子達が歩いてくる。

「初めまして。エレオノール・アルベルティヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエールと申します。ヴィヴィアン様の

ことはお母様から伺っております。よろしく願いします」

「初めまして。私はカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します。シュヴァルツ君もよろしくね」

「は、初めまして。ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと申します。え、えっとよろしく願いします」

1人目は気の強そうな感じの女性、いくつ上なのか分からないが結構離れているだろうと思う。この人だけ金髪でお父さん似なのかなと場違いなことを考えた。

2人目はよく言えば優しそうな、悪く言えばおっとりとした感じのある女性で圧巻なのはその胸だった。母さんと同じくらいあるかもしれない。思わずカリンの胸を見てしまい、笑顔でにらまれた…

3人目はカトレアさんの後ろに隠れながらの挨拶で背格好からこの子が同い年だろうと思う。人見知りなんだろうな〜と見つめていると完璧に隠れてしまった。

「あらあら、ルイズったら恥ずかしがっちゃって。同い年の子が来るってさっきまではしゃいでたのが嘘みたいね」

「ち、ちい姉さま！ 恥ずかしいこと言わないで！ あ、あんたもそんなんじゃないんだから！」

微笑ましい姉妹だなと苦笑しつつ俺も挨拶を返す

「僕はシュヴァルツ・ド・アールハウトと申します。エレオノールさん、カトレアさん、ルイズさんよろしく願いします」

そいつって笑顔を向けるとルイズは顔を赤くしながら隠れてしまっ

た。

「フッフ、ルイズったら赤くなっちゃって」

「ち、ちが。そんなんじゃないの！もう、ちい姉様のいじわる」

と終始こんな感じでカトレアさんがルイズをからかって和気藹々とした時間のパーティーが終わるのだった

第2話

第2話

よう、シュヴァルツ・ド・アールハウトだ

今やっと10歳になって少しイケメンっぽくなってきたとこだ。

あのパーティが終わってから、どうもカリン様に目を付けられたようだ。最低でも1年に1回はヴァリエール家に訪れている。そのたび少し訓練を付けてあげましようとかぼこにされている。

アレだな…。あの強すぎ、勝てる気しない。

でも俺負けず嫌いだから、絶対一矢報いてやる！今のところ俺の攻撃なんてかすりもしないけどな…

ともかく、この5年の間の鍛錬で火と風がトライアングルに水と土がラインになった。この歳でトライアングルってのが珍しいらしくて俺の名前はかなり有名になっている。ついでに四極なんて変な二つ名がついた。でも俺自身はあまりアールハウトの領地を出ないの
で有名なのは名前だけ、俗に言う噂が一人歩きした感じだ。

さて、こうしてある程度実力がついたおれが何をしてるかということだ。

このアールハウト家の領地に出没する魔獣を退治しながら母さんと対カリン様用に特訓である。

親父はというとマンティコア隊隊長の仕事で家を空けがちである。

「さて、シュヴァルツ。今日も始めましょうか」

「いつでもいいよ」

「フフ、最近良い勝負ができるようになったからって慢心しちゃだめよ。まだあなたに負けるつもりは無いのだから」

「いや、いい加減負け続けるのにも飽きたからね。そろそろ勝たせてもらうよ、母さん」

「あらあら、生意気言っちゃって。そろそろ反抗期かしら？」

「違うし！もう、行くよ！ファイヤーボール！」

若干不意打ち気味で撃った魔法だが、母さんは難なく避ける。それと同時にエアハンマーとエアカッターを飛ばしてくる。

「毎回思っけど逃げ道にも魔法とばすなんてエグイよね。アースウォール！」

俺はそれを土魔法で作った壁で防ぐ。ただしこれは母さんの魔法が様子見だからできることで本気の一撃なら壁ごと吹っ飛ばされる。

その後も一進一退の攻防が続く、母さんが風魔法で自身のスピードを上げているので俺の魔法は中々当たらない。かわせない場合も強烈な風を叩きつけて魔法を潰されるので鉄壁である。これがカリン様になるとかわせない場合など無いらしいのでまさに無敵。

俺はといえば風の強化プラス自身の身体能力で補ってる状況である。最初は風魔法が見えないこともあってかわすのに苦戦したが、今ではあえて砂煙を巻き上げるように動くことで風の動きを確認してい

る。

「やっぱり中々当たらないわねえ。どうしよう」

「…相変わらず余裕だよな。でも今日こそは勝つから」

「あら？決め手が無いのはシュヴァルツもでしょう？どうやって勝つのかしら」

「余裕保ってられるのも今のうちだからね！ファイヤーブリッド！
！」

俺の言葉と共に目の前に1メートルほどの炎球が現れ収縮していく。
数秒で10 سانتほどまで小さくなったそれは爆発的なスピードで
母さんの脇を掠めて行った。
思わず呆然とした母さんに杖を突きつけ

「今回は俺の勝ちだよな？」

「…そうみたいねえ。いつか抜かれるとは思ってたけどまさかこんなに早く負けちゃうなんて…。それにしてもさっきの魔法はなあに？見たこと無いものだったけど」

「ずっと考えてた魔法なんだ。母さんやカリン様だと大抵の魔法は叩き落されちゃうでしょ？だから相手が反応できないくらい早い魔法が撃てればなって考えてできたのがさっきのなんだよね」

「たしかにあれば落とせないわねえ。でも次は負けないわよ？」

「そうこなくっちゃ」

ようやく母さんに勝つことができた俺は満足すると同時に母さんの不適な言葉に何か手があるんだなあと気を引き締め更に新しい魔法を考えることにする。

さらに10年の時間で修行をサボっていた訳ではないが、前世で学んでいた武術のキレが落ちていることを実感し始めていたこともあり魔法も含め本格的に誰かに学ぼうと考えていた。

そんなことを考えながら特訓の汗を流していると母さんが親父から手紙が届いたので広間に来るようにとメイドが呼びに来た。

広間に着くと嬉しそうな母さんの顔が目につき、尋ねると心持ち弾んだ声で手紙の内容を話してくれた

「それがね。マンティコア隊の後任が見つかったらしくて、しばらくその後任の人に任せて休暇がもらえるらしいの！フフ、シュヴァルツも嬉しいでしょう？」

「そうですね。…あ！母さん、親父って剣術とか武術の心得ってるんですか？」

「そうねえ。隊長だからある程度はあると思うわよ？でもわざわざそんなこと聞いてどうするつもり？」

「最近、体の方も鍛えなきゃダメだなと思ってて。魔法のことも含めて誰か師匠がほしかったんですよ。だから親父さえよければ教えてもらおうかなって」

「そうねえ。あの人もシュヴァルツに教えたがってたし喜んで教えてもらえると思うわよ？」

「分かりました。帰ってきたら早速頼んでみることにします」

そう言っ母さんと別れると自室へ向かう。

思わぬ展開で師匠ができることに喜びながら何を教えてもらおうかと考えていると部屋に着いてしまい親父の帰りを心待ちにしながら眠りに落ちた。

第2話（後書き）

主人公がカリンに対して様付けなのは5年間の特訓が半ばトラウマ
になってるからですw

2話現在のオリキャラ設定集

設定集

主人公

黒羽刃 改め シュヴァルツ・ド・アールハウト

10歳現在

身長 145センチ

体重 約80リーブル

火と風のトライアングルであり水と土はライン

容姿

赤髪で目はブラウン。前世のなごりか少し目つきが悪い（前世よりはまし）身長も同年代と比べると高くスリムだが力強い印象を受ける。俗に言う細マツチヨ。

全体的に整った顔立ちで、目つきの悪さを含めイケメンである。むしろその目がいい！という人も少なくない。ちなみにカリン様も目に惹かれている

性格

身長と目つき・言葉遣いで誤解されがちだが基本は好青年。きちんと目上の人や自分よりも偉いor尊敬に値する人には敬語（それでも少し荒い）で喋る。ただ切れると荒い言葉に拍車がかかりその目つきと相まって前世ではその筋の人に間違えられたことも多々。

今は自分の親やヴァリエール家の人等、良識溢れる人達との交流しかないので本来の言葉遣いはなりを潜めている。

オリジナルスぺル

ファイヤーブリット

火のスぺルであるファイヤーボールを圧縮し口を離した風船のようにある一点だけ圧縮を開放することによって爆発的な速度で飛ぶスぺル。まだ完成したばかりなので圧縮に数秒のラグが発生するうえ狙いに誤差がでる。2話で母親の脇を掠めたのは半分偶然である。

ライトハルト・ド・アールハウト

身長 190 سانت

体重 190 リーブル

火のスクウエア

容姿

赤髪・赤目でかなりイケメン。マンティコア隊の隊長をしていたことと侯爵家とあってかなり人気があった。シュヴァルツが第一子なのでまだまだ現役であり若さが溢れている。

性格

常に明るく優しい性格で仕事とはいえ家にいることができないことで家族を心配している。優しいといっても甘いわけではなく、厳しいところも垣間見せる。特に戦闘に関しては軍の経験が中途半端を許さず妥協、甘えを一切許さない。

ヴィヴィアン・ド・アールハウト

身長 150センチ

体重 聞こうとすると後ろに般若が見える笑顔で『なあに?』と聞き返してくる シュヴァルツ談

風のスクウェア

容姿

金髪・ブラウンの目でライトハルトと同じく整った顔立ち。体つきもこれぞ女性!と彼女を知る男性達に言わせるほど出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる。

この体つき(特に胸)で時々カリンにいじめられることもあったらしい。

性格

基本は優しくしっかりした女性である。少し茶目っ気がありシュヴァルツが生まれるまではライトハルトが、シュヴァルツが生まれた後はシュヴァルツがよくからかわれている。毎回のよう怒るのではあるが微笑むだけで大した成果も無い。またこの笑顔が本人に良く似合っているから怒る気が途中で失せてしまうとシュヴァルツが愚痴っている。ちなみにカリンの一番弟子である。

ライトハルトと結婚するまでは言い寄る貴族達を軒並み風魔法で吹っ飛ばしていて、師匠であるカリンの片鱗がうかがえる。

結婚してからは幾多の羨望の視線を受けつつも良妻としてライトハルトを支えている。

2話現在のオリキャラ設定集（後書き）

wikiにてリーブルと言うハルケギニアの重さの単位があったのですが自分で呼んでも分かりにくいのでここを借りて追記を

主人公

約37キロ

ライトハルト

約90キロ

です。

第3話

第3話

…よっ！シュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

親父が長期休暇を貰って2年が経った。もちろん2年間ずっと休みなわけじゃないぞ？後任が正式に決まったってことで親父はマンティコア隊の指導役になった。仕事としては隊の訓練と有事の際は再び軍属になることなんだと。でも親父の話だと今までの功績と結婚してから仕事に縛り付けたことの謝罪みたいなもんでそのほとんどを家で過ごせている。

そのおかげで親父に弟子入り？することはすんなり決まった。むしろ親父のほうから声をかけるつもりだったらしい。

俺はこの2年の修行でついに親父達と同じスクウェアに到達した。水と土もトライアングルまでこぎつけた。もちろん同じスクウェアと言っても親父や母さん、カリン様とは雲泥の差で同じ魔法をぶつけ合えば余裕で押し負ける。

スクウェアになったとはいえまだまだ上があるなと再認識してた俺は、今親父と一緒に領地を移動してる。

「親父、今日はどこに行くんだ？またいつもの魔獣狩りか？」

「シュヴァルツ、いつも父さんと呼んでくれと言っているのに…。」

まあいい。今回は魔獣ではない、この辺の村から賊が出るから退治

して欲しいと訴えがあつてな」

「てことは…」

「ああ。シュヴァルツ、お前はすでにかんりの實力を持っている。お前の気持ちに関わらずこれからたくさんのお戦いに巻き込まれるだろう。そのときに相手を殺すことに躊躇すれば、間違いなくお前が死ぬだろう。俺も親だからな、お前に生きていてほしい。そのため少し早いかもしれないが、人を殺すことの覚悟を決めろ」

「……………」

この世界ならいつかそうなるだろうことは想像していた。だがそれが目前に迫って俺には困惑の感情しか生まれなかった。俺にできるのか？人を殺す、殺人が…

「だがなシュヴァルツ、くれぐれも勘違いはするな。相手を殺すことの覚悟を決めるのも大事だが、相手の命を背負って生きていく覚悟を決めるんだ」

「背負う覚悟…？」

「そうだ。俺は軍でもこう教えているんだがな、自分たちがメイジである以上ある程度の戦いはまぬがれん。もちろんその中には命を奪う必要のない戦いもあるだろう。だが大半は相手との殺し合いだ」

俺は親父の話を黙って聞く。親父の言うことは何も間違つてない、だからこそ重みがある。そしてその重要性、覚悟の必要性もわかる。だから一字一句聞き漏らさないように、心に刻むように…

「躊躇すれば即ちそれは自分の死を意味する。だから相手を殺すことは仕方の無いことだろう。だが、それに何の感情も感じなくなればそれはもはや人ではない。必ず自分が殺した罪を自覚するんだ。だがそれだけではいずれその重みに耐え切れず潰れてしまうだろう。ならばそれに意味を持たせればいい。自分の進む信念のための犠牲、

もちろんそれが良い事だとは言わん。だが罪を償うのはいつでもできる。

シュヴァルツ、お前の守りたいもの。自分の信念、正義に忠実に行動しろ。そうすれば自分が倒した相手の命に意味ができる。ただの無駄死にではないとな」

この言葉を頭で明確にイメージしていく。これからのことに躊躇はしてられない。今は親父が隣にいるがいつ1人で戦場に立つかわからない。ならばこういう覚悟は早いほうが良い。

「…そう難しく考えるな、シュヴァルツ。お前はまだ若い、時間は無いかもしれないがせめてお前の覚悟を決める程度の時間は俺が稼いでやる。まだあまり父親らしいこととしてやれてないからな。だから安心しておけ」

そういいながら微笑んだ親父は俺の頭を撫でる。色々考えてきたつもりだったがやっぱり緊張してたんだろう。不覚にも涙のにじんだ目を擦りながら親父に微笑み返した。

「そう、それでいい。お前は俺の自慢の息子だ」

その後、俺は目前に控えた賊との戦闘を考えていた。もちろん負けるなんて微塵も思っていない。ただ覚悟だ。想像の中とはいえ人を自分の手で殺すことを考えていた。親父に教えてもらったことと共に、そうこうしているうちに目的の村に着いた。

親父は村長から賊がどの辺に出没するかを聞きに行くから待っているとわれ、この時間も利用して自分の信念、守りたいものを思い浮かべた。

もう覚悟はできた。

少しして親父が村長らしき爺さんを伴って帰ってくる。そしておれの顔をみて一番に微笑んで

「良い顔になったな…」

この空気で話しづらかったのだろう、村長が遠慮がちに声をかけた

「あの…」

「ああ、スマンな。それで、その賊とやらはどの辺りに現れるのだ？」

「はい、あいつらはここから西へ少し行った森の中に潜んでいるようです。確認したわけではないですが洞窟があるのでそこにいるのではないかと」

「ふむ、わかった。そこまでの道を教えてくれ。それと今まで苦勞をかけたな、対処が遅れて悪かった」

そういつて頭を下げる親父に面喰らった村長が慌てて喋る。

「…そ、そんなめっそうもない！ライトハルト様のおかげでこうして暮らせているのです。更にこんな偏狭の村のためにわざわざいらっしやってくださって。むしろこちらが謝らなければなりません。」

「なに、気にするな。俺にも少し事情があつてな、善意ばかりと言っわけではない。」

「事情と言うのは？シュヴァルツ様のことですか？」

「そうだ。シュヴァルツは親の俺が言うのもなんだが天才だからな。早いうちに覚悟を決めさせようと思ってこれを利用してもらった。」

少し早いかもしれないが、どうやら杞憂のようだ」

親父の話聞き、俺の顔を見て納得したように頷く村長。顔を見ただけで分かるのかと思いながら親父に話しかける。

「親父、こうしてる間もなんか悪さしてるかもしれないんだろ？早く退治してしまおうぜ」

「そうだな。だが無理はするなよ、ダメだと思ったら1人で帰ってかまわん。俺はこの程度の賊で死ぬほど弱くは無いつもりだからな」

「ああ、分かってる」

「ならいい。よし行くぞ」

そいつって俺達は森へ歩き始めた。普段の鍛錬もあってでこぼこした森の中を歩くのにさして苦労はしなかった。

森へ入って1時間程経っただろうか。目の前に目的地と思われる洞窟がある。どうやら村長の予想は当たっていたようで中からは下卑た笑い声や言い争う声が聞こえてくる。

「ここのようだな。中に何人いるか分からん。まずは俺がでかいのを中に放つ。出てきた奴らをここで掃討するぞ？」

沈黙を肯定と受け取った親父が静かに精神力を高め始める。

親父の目の前に直径2メートルを超える火球が出現しさらにそれを取り巻くように50 سانتほどの火球が並んでいる。俺も見た事が無いスペルに興味が出るが今はそれどころではない。風魔法で身体強化し気配を探る。

「フレイムバースト!!」

親父の気合と共にたくさんの火球が洞窟の中へ飛んでいく。一瞬の静寂のあと、今までとは種類の違う声が洞窟から溢れる。

「そろそろ生き残った奴が出てくるぞ」

親父の再三の確認の声を聞きながら感覚を研ぎ澄ます。すると風を伝ってこちらに向かう奴らを感じる事ができた。

「親父、5人来る。その後ろにもう3人」

「風魔法か。分かった最初の5人は俺が引きつけよう。残りの3人を頼むぞ」

黙って頷き、一旦洞窟から距離をとる。少しして中から5人の男が出て親父を見つけて怒声を上げる。そのまま賊を引いていくのを見てから再び洞窟の前へ立った。

深呼吸して落ち着いたところで中から3人の男が現れる。それぞれ手に剣を持ちこちらを睨みながら。

「さっきの魔法、お前がやったのか？餓鬼？」

「俺じゃねえよ。お前らの相手は俺だけだな」

賊の間に笑いが漏れる。俺の容姿で油断でもしてるんだろう。油断してくれるならこっちのもんだと思いながら静かに精神力を高める。

「はっ！お前みたいな糞餓鬼が俺達に勝てると思ってんのか？ああ？」

「当たり前だな。お前ら見たいなクズは俺1人で充分だ」

俺の言葉に賊共がいきり立つ。

「てめえ！なめてんじゃねえぞ！ぶっ殺してやる！！」

その言葉で3人が俺に向かって突っ込んでくる。馬鹿正直に突っ込んできた奴らを倒すためスペルを唱える。

「エアハンマー！」

先頭の奴がエアハンマーで吹っ飛び後ろの2人を巻き込みながら吹き飛ぶ。これで緊張が取れたおかげで後は一方的だった。2人をエアカッターで切り裂き、ファイヤーボールで最後の一人を仕留めた。むせ返るような血の臭気と肉の焼ける臭いで倒れかけたところで誰かに支えられた。

「親父？」

「良くやったな、シュヴァルツ。疲れたろ？今は眠れ」

退治できた達成感とついに人を殺した罪悪感を感じながら俺は意識を手放した。

第4話

第4話

オッス！オラごくゲフンゲフン

よう！シュヴァルツ・ド・アールハウトだ！…最初のは気にするな。

あの賊退治から3年経って俺は15になった。

この3年で身長は170センチに魔法も水がスクウェアになったところだ。親父に弟子入り？して習ってた武術のほうもほとんど習得してこれ以上教えることは無いってお墨付きを貰った。

あの賊退治以降、俺は自分の信念の元にアールハウト家の領地内で暴れる賊共を片っ端から退治した。この影響で領地内で悪事を働くような奴は激減。俺の名前は悪党をびびらせる代名詞みたいになった。おかげで四極って二つ名があるにもかかわらず、正義の化身だとか民衆の味方だとか変な通り名がついたらしい。

こんな通り名絶対名乗らないけどな…。四極で充分恥ずかしい…。

でだ。今俺はもはや恒例行事となったヴァリエール家への訪問のため馬車に乗ってる。なんでもトリステイン王国の貴族は15歳になるとトリステイン魔法学院とやらへ入学して魔法を含めた色々なことを学ぶんだとか。

俺としては魔法も貴族としてのたしなみも正直どうでもよかったから家でのんびりしてたかったんだが、それにヴァリエール家の人た

ちが待ったを掛けたんだ。で、理由を尋ねたら余り人に知られたくないので会って話したいって返答が。そうなるにあつちが公爵家、こっちは侯爵家。当然俺達が出向くことになるわけだ。

そんなわけで馬車の中、俺をわざわざ学院に入学させる事情つてなんだろうなって考えてたのが1時間ほど前。今？相変わらず暇で死にそうだ。

「ほら、シュヴァルツ？あなたも今年から学院へ通うんです。シャキツとなさい」

「そういわれてもですね？正直行く気も無かつたし、まだ俺が行かなきゃいけない理由も分からないんです。なのにシャキツとなんてできませんよ」

「こら！シュヴァルツ」

「まあまあ、ヴィヴィアン。シュヴァルツの気持ちも察してやれ。あいつに魔法の勉強なんてこれ以上必要ないんだ。なのに勉強に行けって言われてるんだから、少しくらい多めに見てやれって、な？」

「しょうがないわねえ。あなたが言うんなら大目に見ることにするわ」

親父に目線で感謝を伝えると、気にするなって目線が帰ってきた。気がする。

そうして横目で親がいちゃついている姿を見つづぐったりしているとヴァリエール家に到着した。

執事に案内された広間にはヴァリエール公爵夫妻とルイズの姿あった。俺を入学させるんだからやっぱ理由はルイズか、と一人納得していると公爵が口を開く。

「わざわざ遠いところ済まなかったなアールハウト君」

「いえ、このくらいなら遠いうちにも入りません」

「よし、では早速シュヴァルツ君に学院へ入学してもらいたい理由を話そう。だがその前に、ルイズ？シュヴァルツ君には自分で話さない」

「分かりました、父様」

そう言うルイズは俺の手を取って。

「シュヴァルツ、あつちで話しましょう？」

と、連れて来られたのはヴァリエール家の脇にある池だった。その岸に繋げてあった小船に2人で乗り少し漕いだところでルイズが口を開く。

「ごめんなさい、シュヴァルツ」

「ん？いきなりなんだよ。謝られる覚えなんてねえぞ？」

「だってあなた学院に入るつもり無かったんでしょ？なのに父様から言われたら断れないでしょ？」

「待て待て。確かに俺は学院に入るつもりは無かったけどな？まだ理由も聞いてないのに謝られても困るぞ。どうしてわざわざ俺に入学して欲しいなんて頼んできたんだ？」

その言葉を聞くとルイズは少し顔に影を落としポツポツと理由を語り始めた。

ルイズは幼少のころから公爵家の娘として有名なメイジの先生を呼んで魔法の練習をしていたこと。だが系統魔法どころかコモンマジックすら満足に使用せずあまつさえ全ての魔法が爆発になること。そ

のせいでいろんな貴族に陰口を叩かれ、カリン様やエレオノールさんに厳しい特訓をさせられたこと。その後もいろんなメイジの先生や練習方法を試したがどれもまったく成果が無かったこと。だから俺に学院に入って貰い味方になって貰おうという話になったこと。最後のほうではルイズは泣き出しており半分くらい聞き取れなかったが、要約するところになった。

俺は何度もヴァリエル家に来ていたからある程度の噂は耳にしていた。だが実際に聞いてみるとルイズの感じた悔しさや悲しさが自分にも伝わってくるようで少し鼻の奥がツンとした。だが男として無様に泣く訳にはいかなかったので堪えるとルイズの背に腕を回し抱きしめるようにして思ったことを正直伝えようと口を開く。

「ルイズ、もう泣くな。な？お前が感じた悔しさとか悲しさとか正直俺には半分くらいしか分かってないと思う。でもな、これだけ言える。お前はがんばったよ。俺もカリン様に特訓させられたことがあるからあの人の特訓が厳しいことは分かる。もちろん辛さもなそれだけがんばったんだ、結果がどうあれ胸を張っていいことだと俺は思うぜ」

「で、でもお。誰も…私のことなんて…認めてなんてくれないもん…グスッ」

「そんなことないさ。ヴァリエール家の人はみんなルイズのことを認めてるはずだぞ。もちろんカリン様やエレオノールさんもな。だからこそ魔法が使えるように厳しいことを言ったんだ。それにな、俺もお前のこと、素直にすごいと思うよ」

俺の言葉を聞いたルイズの目にはみるみる涙が溜まっていき、俺の胸に体当たりするように抱きつくと声を上げて泣き始めた。

10分ほどして落ち着いてきたのか目元を赤く腫らしたルイズが顔

をあげた。

まだ少し鼻をすすっているがつき物が落ちたような晴れやかな表情だった。

「…ありがと、シユヴァルツ。おかげで少しすつきりしたの…。でね？学院の話だけど私はもうだいじょうぶだから嫌なら私から「おいおい、まだ俺何も言っていないだろ？」…え？」

「俺がいつ嫌っていった？学院入ってやるよ。んでルイズがちゃんと努力してるって周りの奴に証明してやる。だからな。もし何か困ったら今みたいに1人で抱え込まずに相談しろよ？な？」

「…うん！！」

よっぽど嬉しかったのだろう。思わずといった感じで抱きついてきてひとしきり喜んだ後突然真っ赤になって飛びのくルイズを可愛いなと思いながら声を掛けた

「ルイズ、結構時間経っちゃったみたいだ。もう親父達の話も終わってるだろうし、行こうぜ？」

差し出した手におずおずといった感じで握られた手をしっかり握り返しながら最初の広間に向かった。そこではルイズの両親と俺の両親が優雅に紅茶を飲んでいるところだった。あの池を見下ろせる窓のそばで…

「あらあら、手を繋いでここまで来るなんて。相思相愛かしら？」

「まさかヴァリエール公爵のご息女を落とすとわ。やるなシユヴァルツ」

「フッフ、これでルイズの婿は決まったわねえ。どうせだしもう1人くらい貰ってもらおうかしら…」

「ルイズを泣かすとは…。フンッ許すのは今回限りだ」

上から母さん、親父、カリン様、ヴァリエール公爵の順である。

ちなみに繋がれていた手は母さんの言葉を聞いた瞬間、真っ赤になったルイズに振りほどかれた。

とりあえずカリン様の不穏な発言は無視して、どうやって誤解を解こうか迷っていると不意に後ろから手を引かれた。振り返ると案の定真っ赤になったルイズが。

「あ、あのね？わ、私はシュヴァルツなら…」

「…なら？」

思わぬ展開に4人の親達も固唾を呑みながら見守る。

「っ…っ、っ…」

「っ？」

「や、やっぱり無理iiiiiiii。シュヴァルツさっきのは忘れて！！いいわね！」

カリン様顔負けの威圧感で凄まれ考えるより先に頷いていた。

「もう少しだったのに、惜しかったわねえ」

「ふむ、やはりこういうものは男から言うべきであろう」

「フフ、どうやらルイズはシュヴァルツ君にべったりのようね。私が見込んだだけはあるわ。やっぱりもう1人くらい…」

「クッ…。ルイズは私にもそんなこと言ってくれたことが無いのに…」

やっぱり上から母さん、親父、カリン様、ヴァリエール公爵である。

カリン様の不穏な企みがただ漏れだが、俺ではどうしようもないのでこの場をどう乗り切るか考えながら来る学院生活をどう過ごすのか悩む俺だった。

第5話

第5話

よあ、シュヴァルツ・ド・アールハウトだ

今の俺は馬車の中…なんか馬車の中から喋る頻度がめっちゃ多いな。まあいいか。

で、今回は何で馬車に乗ってるかって言うところの間ヴァリエール家で話し合った魔法学院、あれの入学式に向かってるところだ。ちなみに隣にはルイズがいる。

あのルイズ大泣き事件（俺命名：センス無いとか言った奴出て来い！）以来ルイズがことあるごとにべったりしてくるようになった。両親達も気でも使ってるのかわざわざ別の馬車を用意して俺達を2人つきりにした。おかげで誰の目も気にしないでよくなったルイズは、終始俺の腕に抱きついてるといった具合である。

「なあ、ルイズ？いつまでそうやってるんだ？」

「学院に着くまでずっと。…それともシュヴァルツは嫌？」

さっきからこの押し問答を5回ほどやっているんだがルイズに『嫌？』って言われながら泣きそうな顔で見つめられると拒絶できん。てかこれはカリン様と別の意味で無敵だと思う、うん。

だが俺も男なわけで、いくらまだ体が幼いとはいえ

「シュヴァルツ？何か今失礼なこと考えなかった？」

「な、なんのことだ？」

「うっん、考えてないならいいの。なんとなくそんな気がただけだから」

幼いは禁句か…。

じゃあスリムとはいえこう抱きつかれるとルイズの細身なんだがきちんと女性と言うか、こう柔らかい感触がだな…。いかん。落ち着け、思考がおかしくなってきた。煩惱退散煩惱退散煩惱退散…

「…ヴァルツ。シュヴァルツ！」

「おわっ！いきなりなんだよ、ルイズ？」

「いきなりじゃないわよ！さっきから呼んでるのに、ずっと上の空なんだもん」

と少しむくれたような顔で言ってくる。可愛い…

あれから俺自身もルイズに惚れたようだ。恥ずかしいからまだ言わんがな。

「ああ、悪い悪い。少し考え事してて。それで？何かあったか？」

「何かって…。はあ。もう学院に着いたのよ」

「なに?!」

俺は慌てて窓から外を見る。そこにはいくつもの塔を回りに配置したトリステイン魔法学院があった。

「お。ほんとに着いてたよ。んでこの後入学の式だっけ」

「ええ、そのはずね。…フッフ、シュヴァルツとの学院生活。楽し

みだわ」

「ん？何か言ったか？」

「え。ううん、なんでもないわよ。それよりあっちに集まるみたいよ？行きましょシュヴァルツ」

「お？おいおい、そんな引つ張るなって」

このときヴァリエール家のご息女と今噂の四極が揃って歩いていることでもかなり注目を浴びてたんだが。少し浮かれていた俺達が気づくわけもなかった。

新入生が集まる講堂にはすでに多くの生徒が集まっている。この学院は3年制でマントの色で学年を見分けるらしい。最上級生が茶色、2年生が深い緑、俺達新入生に渡されたのは深い青のマントだった。早速つけてみるが普段マントなんてつけていなかった俺としてはつけた感慨よりも違和感のほうが大きいくらい。ルイズはというとなんと言うか、さまになっている。思わず鏡で自分の姿を確認したくなった。

「シュヴァルツ、どう？」

「ん。いいんじゃないか、似合ってると思うぞ」

「あ、ありがと／＼」

俺のマントは大丈夫かとゴソゴソしている間にどうやら式が始まったようだ。壇上に上がったのは白いひげを蓄えたいかにも魔法使いたって感じの爺さんだった。まあこういう挨拶ってのは基本的につまらないもんだが、爺さん（オールドオスマンって名前らしい）の話もつまらなかった。

話も佳境を向かえ幾らか感動しているらしい生徒もいる中挨拶が終わる。

「…じゃからして、皆にはこの学院で魔法の何たるかと共に貴族の

何たるかも学んでほしいと思う。各々努力を惜しまぬように！…結構いい挨拶じゃろ？」

最後の俗な発言で感動は吹き飛んだ。まあ元から感動なんかしちやいないが。それにしてもあの爺さん、魔法を切ってから言えいい物を。ボケてんのか？

ずいぶん失礼なことを考えていると不意に爺さんと目が合った。今までは感じなかったが少し感覚を研ぎ澄ませばかなり見られてることに気づく。どうやらここにも俺の噂は広まってるようだ。めんどくせえなあとうなだれている間に式は終わりとなった。

学院は全寮制で男子塔と女子塔に別れているらしくそれぞれ教員にあらかじめ決められた部屋へ案内された。本格的な授業は明日かららしいので、今のうちに少し見学をしようと部屋を出たところで誰かとぶつかった。

「きゃっ！」

「っと。悪い、大丈夫か？」

相手は学院のメイドのようで珍しい黒髪・黒目の女の子だ。尻餅を着いている女の子に手を差し出すと顔を青くしながら慌てて謝罪を始めた。

「も、申し訳ありません貴族様！お召し物が…。どうぞお許し下さい！」

どうもぶつかった拍子にメイドの持っていた紅茶がこぼれたらしい。俺の服には綺麗にシミができていた。

「あゝ。とりあえず落ち着け。このくらいで怒ったりしないから」

少し落ち着きを取り戻したメイドははまだ顔が青いものの少し警戒を解いたように聞いてきた。

「あ、あの、ほんとに怒らないんですか？」

「このくらいで怒ったりしないぜ？火傷した訳でもないし。あ、ついでだ、着替えてくるからこれの洗濯頼めないか？」

「わ、分かりました。お任せ下さい」

「んじゃよろしく頼むな。…んしょつと」

別に裸になるわけでもないしと思って服を脱ぎ始めたのだが、何を思ったかメイドが真っ赤な顔で慌て始める。

「な？！ま、まさかこのような場所？！あうう、私初めてなので優しく…」

「フン！」

とりあえず黙らせるためにチョップを落とす。

「いたっ！なにするんですかあゝ」

「今考えてたのは全部勘違いだ。こんなとこでいたすような特殊な性癖は持ってない」

「え、でも脱いでますし…」

「さっき洗濯を頼んだろぅが、それに下まで脱ぐ気は無い。上を脱いだとこで問題はないだろう？」

と言いながら脱ぐのを再開、するとさっきのメイドがいまだに真っ赤な顔で俺の体をチラチラ見ていることに気がついた。

「そんなに俺の体が珍しいか」

「?!い、いえ、そういうのではなくてですね…。ただ綺麗だなと」

「綺麗？」

「あ、いえその、なんといいますか。はうう…」

「何でもいいが、流石に少し寒いな。ほらこれ、洗濯頼むな？…ああ忘れてた。名前は？」

「は、はい。私シエスタと申します」

「シエスタね。了解覚えた。俺はシュヴァルツ・ド・アールハウト。これから世話になると思う、よろしくな」

いい加減寒くなった俺は自分の部屋へ戻る。部屋の外で『あれが四極とよばれる…』とかなんとか聞こえた気がするが気のせいだろう。ぱぱっと着替えて再び学院を探索に乗り出したのは言うまでも無い。

第5話（後書き）

ルイズもシエスタも崩壊してる気がする…

キャラの再現って難しいですね（A ; ' . ω . ）アセアセ

感想等ありました遠慮なくお願いします。

第6話

第6話

よっ！シュヴァルツ・ド・アールハウトだ

トリステイン魔法学院に入学して早くも一ヶ月が経った。クラスは無事ルイズと一緒にのクラスになった（カリン様がニヤニヤ笑ってた気がするのは気のせいだろうか…）

一ヶ月もすれば授業の内容にも慣れて、クラスの奴らとも打ち解ける雰囲気になるはずなんだが…。

なんだろうね、よく向けられる鬱陶しい視線。妬みとか嫉妬とか羨望とかそんな類の視線があっちこっちから向けられてくる。まあどうせみんな雑魚だし、あんまり気にはしてないんだけどな。

ともかくそんなことは置いといてだ。

一ヶ月で俺とルイズは良くも悪くも有名になった。ルイズの魔法が使えないってことが周知の事実となり、ゼロのルイズなんて不名誉な二つ名までついた。俺のほうはと言えば、ことあるごとに四極なんだから…みたいなことを言われて色々やらされそうになる。この間はヴィリエだったか？まあそんな名前の奴から子分になれと言われた。まあヴィリエのことも含め全部断ってやったがな。

更にルイズのべつたりが相変わらずなせいで、俺達が付き合ってる

って言う噂が学院内を回り始めている。俺もルイズのことが好きだから問題無いと言えばそうなんだが、いかんせん恥ずかしいな。周りからも冷やかされるし。

ただこれのおかげでゼロって二つ名がついたことに対するルイズの怒りは軽くなった。

『私がシュヴァルツと…ウフフフフ』なんてニヤニヤしてたが…。

さて回想はこの辺にして。ん？今回はどこで思い出してるかって？授業中の教室だがなにか？

いや、悪いことだったのは分かってるよ？ただつまらなすぎて…。もう知ってることをもう1回習うって…。

ついでに言えば今の授業はギトーとかいう風魔法を狂信的に信じてる1番鬱陶しい奴だからなおさら憂鬱だ。この授業を体験すれば俺の気持ちがよく分かるだろう。

そうそう。授業を受けて初めて知ったが、授業中の席ってのは自由らしい。あれだな、早い者勝ち。ここまで言うとか体の人が気づくだろ。俺の左隣にはルイズが座ってる。だがルイズも授業中は授業に集中するようで真面目に先生の話を聞いている。俺が動こうとすると必ず反応するけどな。

だが最近これに問題が発生しつつある。問題ってのは俺の右隣なんだが

「もぉ、ダーリンたら何気難しい顔して考えてるのお？」

「いやキュルケ。近づきすぎだろ」

「ええ〜？いいじゃないこのくらい、スキンシップよ。スキンシップ」

逆隣からバキツと今日3度目くらいになる羽ペンの折れる音がする。そう問題ってのはどういうわけかキュルケに気に入られたことにある。こうなったのは1週間くらい前か。

新入生達の親睦を深めようってことで毎年開催されるパーティってのがあらしい。もちろん俺も出席したわけだが、そこに集まる奴らの中に一際目立ってる2人がいた。それがキュルケとタバサっていう女の子だ。

キュルケは俺と同じ真つ赤な髪に褐色の肌、胸元のざっくり開いたドレスからは見事な谷間がゲフンゲフン。二つ名は微熱で男との噂が絶えないゲルマニアからの留学生だとか。ルイズに聞いた話だとちようと国境を挟んで隣同士のヴァリエール家とキュルケの実家はたびたび揉めてるらしい。そのせいかルイズとキュルケもあんまり仲がよくない。

キュルケが目立っていたのはその回りに男がわらわらといたからである。

次はタバサ

タバサは水色の髪にめがねを掛けていてルイズよりも幼い体形の少女だ。普段は本を片手に身の丈よりも大きな杖を持ち歩いているのだが、今回は壁際に立てかけてあった。じゃあ何が目立ってるかっているとその食べっぷりだ。その小さな体のどこに入るんだって位の量を一心不乱に食べている様は圧巻だ。しかもハシバミ草っていう苦味のある野菜を使ったサラダを入れ物ごと抱えて食べる姿はシユール以外の何者でもない。

自然とその2人に目が行く中で奇妙な動きをしている奴らを見つける。

キュルケの周りにいる数人の女子とヴィリエ？（どこぞの女神とかぶるかもしれないがこれに決定）がコソコソと何か喋っているようである。

あからさまに何か企んでますよという雰囲気を見無視できるわけもなく、何かしでかす前に釘を指しておこうと歩き始めたところでヴィリエ？が杖を出してスペルを詠唱し始めた。

まずいと思って走り始めるが間に合うわけもなく。ヴィリエ？の放ったエアキャッターでキュルケの着ていたドレスが破かれた。咄嗟にその辺のテーブルクロスを引き抜いてキュルケに纏わせながらレビテーションで脱出。

「え？え？何が起こったの？というかあなたは？」

いまだに何が起こったか分かってないキュルケが場違いなことを口走るが俺だって冷静なわけじゃない。

なにせ散々男を魅了してきたキュルケをテーブルクロス1枚挟んだだけでお姫様抱っこである。色々とやばいが悟られたら終わりということで必死で冷静な顔を作って答える。

「俺はシュヴァルツ・ド・アールハウトだ。あとあんまり動くな。その…見える／＼／」

「え？きゃっ！なに？何であたしのドレスがこんなことになってるのよー！！」

「ま、待て。とりあえず落ち着け。まずは着替えるのが先決だろう。このまま部屋まで連れてくから場所を教えてくれ」

キュルケとはいえやっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいんだと、

顔を赤くしたキュルケを抱きかかえながら部屋まで飛んでいった。
キュルケを部屋に入れたあと、とりあえずヴィリエ？ + α に制裁を
加えるべくもと来た道を帰った。

だがそんなこととは知らないキュルケは、ドアの隙間から差し込ま
れた手紙に書いてあるタバサが犯人の文字を信じてタバサに決闘を
挑んだ。何故か俺を審判役に。

俺が審判役になったのはヴィリエ？ + α を探しているところで、突
然腕を引かれ連れてこられて審判役を押し付けられたのだ。なぜタ
バサとキュルケが決闘なんて始めるのかさっぱり分からないが理由
がどうあれ一度挑んだ決闘は無くならない。

しょうがないと審判役と受けたところで視界の端にヴィリエ + α が
映る。あいつら決闘が終わったら覚悟しとけよと呟きながら開始の
合図を送る

「始め！！」

その言葉と共にキュルケがスペルを詠唱する。

「フレイムボール！」

危なげなくかわしたタバサはお返しとばかりにスペルを唱える。

「エアハンマー」

俺は審判として2人の戦いを眺める。魔法という意味ならたいした
差は無いが…。タバサ、あの動きは実戦を知ってるな。しかもかな
りの数こなしている。

実戦を知っている以上タバサの勝ちが揺るがないと判断した俺はい
つ止めに入るかを見極める。

エアハンマーを唱えたタバサはそのままキュルケの背後に回る。キュルケはエアハンマーに気を取られていてタバサに気がついていない。そしてタバサはスペルの詠唱に…

ここで観察をやめて俺は決闘を止めるため2人の間に入る。だが既に完成したスペルは止まらない。

タバサの唱えたウィンディアイシクルが俺とキュルケに向かってくる。

「両者そこまで！アイアンウォール！！」

ウィンディアイシクルを土魔法のアイアンウォールで防ぎ決闘の終了を伝える。

「勝者タバサ！いいな？キュルケ」

「ええ。あなたが守ってくれなきゃ今頃それで貫かれてたでしょうね」

「だが何でタバサと決闘なんかしたんだ？」

「あたしの部屋に手紙が来てたのよ。犯人はタバサだって、だからついカッとなって挑んだの。でも戦ってみて分かったわ。犯人はあなたじゃないわね。こんなに強いんだもん、わざわざあんなまどろっこしいまねする必要ないわ」

「どうやらこれもヴィリエ？達の作戦だったようだ。見事に嵌められた俺は釈然としない。」

「あなたも十分強い。久しぶりに本気を出した」

「あら？ありがとう。ねえ、あなた名前は？」

「タバサ」

「タバサね。私はキュルケあなたとは仲良くなれそうだわ」

ふむ、どうやら2人に友情が芽生えたようである。そういう意味じゃヴィリエ？達の行動にも少しだけ良い点があったのだろう。だがそれと許すこととは別である。

「おい！そこにいるお前ら！出て来い。出てこないなら遠慮なく魔法を撃つぞ」

そういうとびくびくしながらヴィリエ？+αが姿を現す。大方2人の決闘を見てびびったとかそんなところだろう。

「キュルケ。あいつらが犯人だよ。会場で一部始終俺が見てた」

「へえ…。あんたたち良い度胸じゃない。わざわざこんな回りくどいまねまでして」

「う、うるさいのよ！色目ばっか使っちゃってこれだからゲルマニア貴族なんて」

「なんですって！！」

「ひっ！」

キュルケは回りくどいことが嫌いなんだろうと思いつつ、今にも掴みかかりそうなキュルケをとめに入る。

「まあ待て、キュルケ」

「なによ！あんたもあたしの邪魔するつもりなの？！」

「そ、そうよ。私達には四極がついてるんだ「黙れ！調子に乗るな！」「ひい…」

「こいつがどうなろうと知ったことではないが、今キュルケが手を出したら問題になる。きちんとオールドオスマンからこいつらの親に連絡して貰うのが一番だろ」

「ふ、ふん！このくらいで罰せられるわけが」

「まだ気がついてないのか？ キュルケはゲルマニアのタバサはガリアの留学生だ。この2人を争わせたんだ、下手をすれば外交問題にも発展するだろ」

俺の言葉に顔が青を通り越して白くなりカタカタと震えるヴィリエ？ + α。いい気味だと思いながらも本気で外交問題はまずいので少し助け舟を出す。

「まあ、そこまではしなくてもいいだろ？ キュルケ、タバサ」

「そうね。でもきちんと罰は受けてもらうわ」

「それで構わない」

「了解。んじゃ俺がオールドオスマンには伝えとくよ」

「ええ。というか正直もうどうでもいいわ」

「は？」

先ほどまでの怒りようがまるで嘘のように明るい表情になったキュルケがにじり寄ってくる。

「な、なんだ？」

「ねえ？ シュヴァルツって彼女つていたりするのかしら？」

「な……。い、今はいないが好きな相手ならいる。キュルケじゃないぞ」

「まあ。つれないのね。でもそれが燃えるわ。必ず振り向かせて見せるから。期待しててね？ ダーリン」

いきなりの略奪愛宣言にどう反応していいかわからず固まっているとキュルケとは逆方向から腕を掴まれた。振り返ったところにはタバサが

「私もあなたが気になる」

「あら？タバサなもの？」

「違う。さっきあなたは私の魔法を止めた。あなたの実力に興味がある」

「そういえばそうねえ。まあ四極なんて呼ばれてるんだし。かなり強いことは間違いないわねえ」

と、こんな感じで目を付けられたわけである。それからというもの毎日のようにルイズとキュルケの喧嘩に挟まれる生活である。

ちなみにタバサはキュルケの右隣に座っており、普段は本を読んでいるが時々探るような視線を俺に向けてくる。言い寄られるのは嬉しいが2人の喧嘩の重圧と、キュルケが振った相手からの嫉妬の視線。さらにルイズやタバサまで侍らせていると思われるらしく、男子全員から親の敵を見るような視線を注がれている。

俺の胃に穴が開くのも時間の問題かもしれないな…

第6話（後書き）

さて 感想に二つ名の語呂が悪いつて指摘があったので修正すべきか悩んでいます。あの二つ名に特に意味はないのでこんなもの？っていうのがあれば感想にいただけると幸いです。

第7話（前書き）

お気に入り登録100件突破！

だからというわけではないですが今回は日常パート…

うまく書けんorz

第7話

第7話

おう、シュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

あれからまた一ヶ月経って、入学して二ヶ月が経過した。

この一ヶ月は特に何も無かったな、あくまで俺の主観だな。

起きたら目の前にキュルケの顔があって、俺を起こしに来てそれを見たルイズが俺の部屋を吹っ飛ばしたりとか。

こんなのは日常だ。うん。

思い出していると寒気がするから回想はこの辺りでいいだろう。

今日は虚無の曜日と呼ばれるハルケギニアの休みの日だ。この日は授業も無く、申請を出せば学院から外出することもできる。もちろん俺は毎回のように外出している。

何故かって？そりゃ一週間乗り切るための暇つぶしの道具を買いに…。

前回も言ったがなマジでつまらんだ。だから少しでも有意義に過ごそうと思ってだな…。

言い訳じみてきたからやめだ。まあまるっきり無駄なことをしてるわけじゃない。俺の指には自作の指輪がはまっている。これは杖の

代わりとなる特殊な指輪で、これのおかげでタクトみたいな杖を持ち歩かずに済んでいる。この杖は学院に入ってすぐ作ったから入学して一週間が経つころには俺の指にはまっていた。

この指輪を見て『誰から貰ったのよ!!』ってルイズに問い詰められたのも今じゃ思い出だな。問い詰められるどころか追い掛け回されたけど…

で、今は馬車の中。俺1人なら馬で行くんだが、馬車の中には俺を含め4人いる。

「ちょっと！キュルケ！そんなにシュヴァルツに抱きつかないで！シュヴァルツが重いでしょう！」

「あゝら？誰かさんみたいに貧相な体で抱きつかれてもシュヴァルツは嬉しくないでしょう？」

「…」（ペラッ）↑本をめくる音

終始こんな感じである。周りの目がない分、学院よりも大胆になった2人に挟まれて天国であり地獄だ。

どうしてこんなことになったかと言うと、俺は授業中に暇つぶしをしているわけだが。俺の周りにはいつもこの3人がいるわけで。その3人が俺に興味を持ってるんだから、外出を知らば着いていくというのはある意味必然だった。

「…2人とも落ち着け。体とかは関係無い。その好意が伝わってくるのは嬉しいけどな」

「シュヴァルツ…／／／」

「もう、女誑しね／／／」

「…」（ペラッ）

最近は喧嘩の止め方がなんとなく分かってきた。ただ俺の精神的ダメージとしては喧嘩が続けられるのと大差ない。俺はギーシュのようにはなれん／＼

ギーシュってのは学院の同じクラスの奴で二つ名は青銅、かなりの美形ではあるのだが…。いかんせん女の噂が絶えんな。金髪でいつも回りの女子に気障なセリフを囁いている。余談だが服にこだわりなんて持っていない俺から言わせても服のセンスが無い。

話がそれたな。

まあ喧嘩を止めるには2人ともにギーシュのように気障なセリフを囁けばいいというわけである。囁いた後には顔を赤く染めながら黙ってしまうので喧嘩が終わるって訳。

ただタバサにじつと見つめられると2人に気障なことを言った直後つてのもあつてすごく気まずい。あの無表情が一番辛いのだ。

本格的に俺の胃が心配になってきたところで馬車は目的の町へ着いた。

さて今日はなにを買うかとぶらぶらしていると左右から腕を引かれる。

「シュヴァルツ、あそこに面白そうなものがあるわ!」

「ほら、シュヴァルツ。あれ面白そうだと思わない?」

案の定ルイズとキュルケの間に火花が散る。あくまで俺の買い物なんだが…。なんて思うが口には出さない。

「2人とも、あんまり騒ぐと目立つぞ。順番に行けばいいだろ? まずはルイズのほうからな」

そういうとルイズは嬉しそうな顔になり、キュルケは無然とした表情になる。

「いきましょ、シュヴァルツ」

「シュヴァルツがそういうんじゃないわね」

「…」（ペラッ）

タバサ…。まだ本読んでんのか…。

その後も主にルイズとキュルケに引つ張りまわされる形で町を散策した。時々面白そうなものは見かけるのだがこれといったものが無く、今回は無駄足だったかなと思いついたところである店が目止まった。言い争ってる2人は放っておいてその店に向かう。そこに置いてあるのは宝石をあしらったアクセサリーだった。

こういうのは内緒にしているのが面白いので素早く買うと喧嘩中の2人とその隣にたたずんで本を呼んでるタバサの元へと戻った。

「まったく、2人ともいい加減にしろって。タバサも少しは止めてくれ…」

「だってキュルケが！」

「なによ！ルイズのせいでしょう！」

「私には無理」

「はあ…。とりあえずそろそろ帰るぞ」

4人で馬車を預けた場所へ移動する。その途中、魔法薬の店を見つけて閃いた俺は3人を少し待たせて大急ぎで買い物を済ませた。

「なにを買ったの？」

「私も気になるわね。シュヴァルツが作るものは面白いものが多いし」

「同感」

「今回は魔法薬の材料だよ。なにを作るかはできてからの楽しみで」

「ふうん。まあシュヴァルツが作るんだし、すごい物ができるんでしょうね」

「どうせなら惚れ薬を作ってくれないかしら？」

「なっ！それは卑怯よキュルケ！」

「恋は戦いよ？これだからお子様なのよ」

再び喧嘩の始める2人。口ではルイズに勝ち目がないのでフォローを入れつつ仲裁に入る。流石に無いとは思うが街中で爆発なんか起こされちゃまずいからな。

気を使いながら馬車を受け取り、学院へ帰る道の途中。

「ルイズ、キュルケ、タバサ。これやるよ」

「シュヴァルツ、これは？」

3人を代表してルイズが聞く。他の2人も同様に小首をかしげているようだ。

「まあ開けてみるって。3人に似合うと思って買ってきたんだ」

「ほんと！」

「プレゼントね？なにが入ってるのかしら」

「……」（パターン）↑本を閉じた音

それぞれ違う反応でプレゼントを開け始める。

「わぁ…」

「センスいいのね」

「綺麗」

中に入っていたのはピアス。付いている宝石はそれぞれの髪の色と一緒にある。

「気に入ってもらえたようで何よりだ。まあついて来てくれたお礼とでも思ってくれ」

「私にも？」

タバサが不思議そうな顔で聞いてくる。本ばっか読んでたからプレゼントがもらえたのが不思議なんだろう。てか気が付いてたならやめればいいのに…。

「一緒に来てくれたことには変わらないだろう？それに絶対似合うと思っただんでな」

「そう、ありがとう」

そのときのタバサはいつもと同じ無表情のはずなのに少し笑って見えた。

普段ならこんな空気を作ればルイズがキュルケが突っ込んで来そうなものだが、ルイズはピアスを見ながらブツブツと何かを呟いているし、キュルケはこちらを見ながらニヤニヤしてた。

キュルケはなにがしたいんだ？

その後はルイズのブツブツ呟く声と、タバサが再び読み出した本をめくる音をBGMに馬車は学院を目指して進むのだった。

ちなみに、俺が買った魔法薬の材料だが。なにを作るかは勘のいい奴はもう分かってると思う。

胃薬だ…。

第7話（後書き）

感想&指摘ありがとうございます。

誤字の指摘がいくつかありましたので近いうちに直します。

他にも日本語のことや文末のこと

未熟な作者なのでダメなところが多々あると思いますが精進していきますので遠慮なく指摘していただければと思います。

第8話（前書き）

少し間が空いて、気が付けばユニークが100000PVが8500
0Σ（、A、ノ）ノ

まさかこの駄文をこんなに見ただけとは思えない限りです。

そして皆さんの感想を下に独断と偏見で二つ名を変更しました。
もし誤字等見つけた場合は報告していただけるとありがたいです。

第8話

第8話

よっ！シュヴァルツ・ド・アールハウトだ

今俺はアールハウト領のラルドって村にいる。なんでそんなところに
いるかって？なんでもこの辺に魔獣が出現するとか。

ほんとなら親父なり母さんが行くべきなんだが、親父はタイミング
の悪いことに王都に仕事に行ってる。

母さんは…『シュヴァルツに任せておけば私が行くより安心でしょ
う？』って言われた…。

最近手合わせしても俺が勝つから少しいじけてるらしい。大人気な
と思うかもしれないが母さんだしな。いつもの茶目っ気の延長線
上だろう。親父が何とかするって言ってたし、いい気分転換だ。

学院に入学して三ヶ月経ったところに親父からの手紙が来て今に至る。
元々俺は勉強する必要もなかったし、二週間ほどの休みを申請した
らすぐ通った。学院からの許可はすぐ下りたんだが…。ルイズとキ
ュルケを説得するのに一週間も掛かってしまった。

最初は俺をなんとか学院にいさせようとしていたが、理由を聞いて無理と判断すると一緒に行くと言い出したから困った。ルイズはトリストインでかなりの力を持つ貴族だし、キュルケはゲルマニアの貴族だ。万が一何かあったらただじゃ済まない。まあこんなのは建前で単純に怪我をしてほしくないからなんだけだな。

なんとか説得に成功したが、『無事に帰ってこないと承知しないから！』って言われちゃった。

ここまで言われて怪我なんてできるわけがない…。

まあそんなこんなでラルドの村に来たわけだが。ずいぶん悲惨なこ
とになっている。

崩れている建物が数件、柵にも壊れた箇所が多々あり畑も荒れている。正直ここまでとは思ってなかったな…。

その惨状に啞然としていると話しかけられた。

「あの…？あなたが魔獣を退治してくれるという貴族様ですか？」

「ああ、俺はシュヴァルツ・ド・アールハウト。親父たちの代理で来た」

「おお！あの四極様に来ていただけたなら安心です」

「全力を尽くさせてもらう。それでその魔獣の情報は？」

村長らしき人物は魔獣のことを語り始めた。

体長は人間と同じくらいで、常に3匹ほどで村を襲っていたとか。外見は狼を大きくした感じで突然村を襲うようになったらしい。

「なるほど…。来るのが遅くなって済まなかったな」

「いえ。ライトハルト様も王都へお出かけになっ
ていますし、致し

方ないことです」

「そう言って貰えると助かる。それじゃ早速退治に向かう。いつも西の森から襲ってきてたんだな？」

村長が頷いたのを確認してレベーションで移動する。狼型だから鼻が良い可能性があるので風下からの搜索だ。

探し始めて1時間ほど、所々に爪あとや足跡の痕跡を見つけながら移動していると轟音が響いた。いったいなにが起こったのか分からないが、とりあえず確認するために音の方向へ移動していくと肉の焼ける独特なおいが漂ってきた。

いよいよ何かあったと気を引き締めて進むと少し開けた場所があり、そこで俺が見たものは。

「グルアアアアアアアアアア！」

「……………ドラゴン、だと…」

そこには神々しいほどの威圧感を放つ、紅蓮の竜がいた。

思わず足が竦むが必死で木の陰へと隠れて辺りを窺う。

火韻竜が暴れたのであろう、へし折れた木や先ほどの爆音の発生源と思われるクレーター、その中心ではいまだに煙を上げている狼であつた残骸が。

「アオオオオオオオオオ！」

狼の声にそちらへ目を向けると火韻竜を取り囲んだ10匹ほどの狼が突っ込んでいくところだった。どうするべきが分からず眺めていると火韻竜に対して違和感を感じた。火韻竜が動きが鈍いのだ。伝説などで登場する竜は決して魔獣に負けるようなことは無いのだが、目の前で繰り広げられる戦いは明らかに火韻竜が押されている。

更に今までは火韻竜の鱗の色で気がつかなかったが、よく見ればあちこちから血を流しているのだ。魔獣に付けられたものもあるのだろうが、他とは違う大きな傷が体の数箇所に見て取れた。

あの竜になにがあつたのかは分からない。だが狼どもから逃げないのはなぜだ？

竜のプライドと言われればそれまでだが、何かが違う。と、戦況を眺めていると竜の足元で何かが動いた。それはいまだ可愛さの抜けない火韻竜の子どもだった。

竜が逃げないのは足元にいる子竜を守るためだったのだ。それをふまえたうえでもう1度竜を見ると、その目には断固とした決意の色が見えた。

その雰囲気だけでなく生き様まで誇り高い竜の姿に自分はどうかと思わず考えてしまうが、今はそんな場合ではない。

今も狼達と竜の戦闘は続いており、時間が経てば経つほど狼達の有利になっていく。

「行くか…」

思わず呟き飛び出すタイミングを見計らう。正直言えば出たくない。竜は子どもを守るために必死だ。たとえ助けるために飛び出したとしても攻撃されないという保障はない。

だが、目の前の光景を見て黙っていることはできない。相手が人だとか竜だとかは関係ない。

竜が大きな口を開けブレスを吐く。それを避けるように狼たちが距

離をとつた。

出るなら今！

「フレイムボール！！」

俺の放った直径3mほどの火球が近くにいた狼に命中する。思わぬ方向からの攻撃に動揺が走ったようだ。そのうちに次の魔法を詠唱し始める。

「カッタートルネード！」

俺の生み出した竜巻が3体ほどを巻き込んで切り刻む。

ようやく動揺が鎮まったようだがここからは一方的だった。竜も弱っているとはいえ一匹ずつ倒すぶんには何の問題も無く、俺からも攻撃するため二方向からの一方的な蹂躪だった。

最後の1匹を倒したが、まだ気を抜くことはできない。目の前の竜の出方が分からない。もし攻撃されるようなら必死で逃げる必要がある。

今までは別の意味で張り詰めた空気の中、先に口を開いたのは竜だった。

「…貴様は何者だ？」

なんとか平静を保ちつつ答える。

「俺はシュヴァルツ・ド・アールハウト。この辺一帯を治める貴族

の息子だ」

「ほう。貴様がこの辺りを治めているのか、なら話は早い。先ほどの助力には感謝しよう。だが貴様等人が先ほどの狼共のように我らに向かつてくるなら容赦はしない」

「だから放っておけというのか？それではこちらに利がないな。しかも近くに韻竜がいるなんて下手をすれば大騒ぎだ」

「ふん。貴様等の事情など知ったことではないな」

「王国から討伐の命令が下れば困るんじゃないのか？」

「…我を人間風情が脅すのか？」

周囲の温度が下がったのではないかと錯覚するような威圧感。だがここで言い負けるわけには行かない。

「これは事実だ。命令が下れば王宮お抱えの親衛隊が出てくるだろう」

「…ふん。しょうがない、目立たなければいいのだろう」

「なにをする気だ？」

その言葉に答えず竜が何かを呟いたと思うと辺りをまばゆい光が包んだ。

その光が消えたあと竜がいた場所には妙齡の女性が立っていた。

裸で…。

「なっ?!」

慌てて後ろを向くが見てしまった。キュルケよりも更に大きな胸が
… 煩惱退散煩惱退散煩惱退散。

「人の姿になるなどいつ以来のことか。… 何をしている？」

後ろを向いてブツブツ呟く俺に怪訝な声が掛かる。怪しいと思うのは分かるがしょうがないと思う。

「お、お前女だったのか?! というか服を着ろ! 服を!」

「む。なんだ貴様、意外と初心だな。だがあいにく服なんてものは持っていない」

「う、うるさい! だったらこれを羽織ってろ!」

そいつってマントを後ろに放り投げる。

「ふん。こういうものを見に纏うのは嫌なんだがな。致し方ないか」

ゴソゴソとした音が止んだのを聞いて振り返り話を続けようとするが、妙齡の美女がマントを見に纏うだけというのも… 煩惱退散煩惱退散煩惱退散。

雑念を必死で振り払って話を続ける。

「まあその姿なら問題無いか。服はあとで届けよう。だができるだけ大人しくして欲しい」

「だから貴様等の事情など知ったことではないと言っているだろう

？こうして人の姿になっているのが最大限の譲歩だ」

「…分かった。近くの村の人にはこの辺に近づくなと言っておこう。傷が癒えたら移動するのだろう？」

「そのつもりではあるがな。せいぜい同じ人間共の動向に気をつけることだ。この姿でも人程度なら楽に殺せる」

「よく言っておく。じゃあ俺は行くぞ。ゆっくり傷を癒すといい」

「言われずともそのつもりだ。…最後に一つ、我等は恩を忘れん。必ず借りは返す、困ったときは我が名を呼べ。我が名はクシヤス」

「クシヤスか。覚えておく」

そういつて俺は森を後にした、竜の決意を秘めた瞳を見たときに感じた自分自身への違和感を抱えたまま。

第8話（後書き）

HAHAHA。

つい勢いで出してしまった韻竜クシャス…。

ただゼロ魔にこういうお姉さんの人がいないよなあと…
カトレアさんがそんな気もするけど強気な人はいない！

勢いで出しちゃったけど先の展開なんも考えてない件

HAHAHA

がんばるますorz

第9話（前書き）

…
なんかもうね…自分の文才の無さに凹みまくった回でしたorz

第9話

第9話

ん、シュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

魔獣討伐のときに遭遇した火韻竜。クシャスと出会ってから一週間が経過した。

この間に俺はクシャスに服等を渡し、ラルドの村には「魔獣は退治したが正確な数が分からないせいで生き残りがいるかもしれない」なんてもつともらしいことを言って近づかないようにした。

これでクシャス達が誰かに見つかるようなことは避けれるだろう。

さて、こうして過ごしていた俺は今アールハウト家で余った休暇を過ごしている。

こういう言い方をするとゆったりしているように聞こえるかもしれないが、実際はいまだにクシャナの瞳を見たとき感じた違和感で悶々としていた。

原因はもう分かっている。

俺にもああいう瞳をしていたときがあったのだ。

だが今の俺はそんなまっすぐな瞳をしてはいない。

この貴族の世界を根本から変えると決意してすでに10年、知らない間に俺も他と大して変わらない貴族になってしまっていたようだ。俺が力をつけたのはこのためだったはずなのに…

こうして気づいた今、早速あのころの決意の元に行動できるかといえは答えは否だ。

行動自体は簡単だろう。これまでの努力で俺はかなりの力をつけた。トリステイン内なら勝てないのはカリン様位なんじゃないかというくらいまで。

だが、俺が自由に行動すれば俺の周りに迷惑が掛かる。アールハウト家は侯爵家でありそうそう手は出せないだろうが安全というわけじゃない。

俺の決意は結局のところ俺のエゴだ。そのエゴで周りに迷惑を掛けるなら俺が我慢すればいいんじゃないのか？

こんなことをずっと考えていた。

自室で思考のループに埋もれていると親父と母さんに呼び出された。

広間には昨日帰ってきたばかりで疲れているであろう親父と母さんが座っている。

広間を包む真面目な雰囲気一体何の話だろうと思っていると、親父が口を開いた。

「シュヴァルツ、ヴィヴィアンから聞いたぞ？魔獣退治の一件以来

お前の様子が変わって。何があった？」

親父の言い方に俺はそこまでおかしかったのかと苦笑した。何かあったのか？ではなく何があった？と聞かれたんだ。

「…そんなに変わったか、俺。正直に話すよ」

すでにクシャスのことは伝えていたから、あの瞳の件、そして俺の悩みの件を正直に話した。

全て話し終えた後、おもむろに母さんが立ち上がり俺の前まで来たかと思うとパシンツと乾いた音が鳴った。

痛みは大したことはない。そんなことより頬を叩かれたという事実に驚いた。

俺が呆然としている間に母さんは部屋を出て行った。その目に涙が浮かんでいたのは見間違いではないだろう。

「な…んで…？」

俺が発した言葉はそれだけだった。怒らせるなんてかけらも思ってなかった俺には完璧に不意打ちになり理解が追いつかない。

「正直なところ、俺もお前を殴ってやりたいくらい頭にきている」

親父までなのか？どこで俺は怒らせた？

「シュヴァルツ、お前が俺やヴィヴィアンに一線を引いているのは感じていた。だが、それでもどうしても困ったときや悩んだときは

親として、俺達のことを頼ってくれるんじゃないかと思っていたんだ」

…ばれていたか。いくら育ててもらったとはいえ何の遠慮も無しには接することはできなかった。どうしても前世の親の顔がちらついで。

おかげで親父に言われた通り一線引いたような関係になってしまったわけだ。

親戚の家に泊まった感じだろうか。そこまで余所余所しくもないか。

「だがお前は一人ですべての悩みや困難を抱え込んで、俺達には何一つ明かしてくれなかった。なあ、シユヴァルツ。俺達は親としてそんなに信用できないか？ 確かにお前は強い。魔法の腕も、戦闘の腕も、15とは思えないほど大人びているし努力を欠かさないくらいに自分に厳しくすることができる。他の貴族ならなんとも思わない平民の事で心を痛める優しさも持っている。だがお前一人で何でもできるわけじゃない、それがお前の悩みの種だろう？ ならなんで俺達を頼ろうとしない？ 迷惑が掛かるかもとか、俺のわがままでもか、そんなことはどうだっていい。…子供は親に迷惑を掛けるものだろう！」

喋ってるうちにふつつつと怒りが沸いてきたのだろう。最後は怒鳴り声だった。

その怒鳴り声で親父がどれだけ怒っているのかが伝わってきたような気がした。

俺は知らない間にこんなにも親父達を悲しませていたかと思うと後悔と自責の思いが込み上げてくる。

「…スマンな。取り乱した。だがこれで分かってもらえたか？」

「ああ、親父。ありがとう、そしてごめんなさい」

「分かってもらえたならもう気にすることは無い。それより早くヴィアンを追いかけて謝って来い」

「…わかった。ほんとにごめん。必ず埋め合わせはするから」

そう言つて母さんを探すために部屋を飛び出した。後ろから『なら早く孫の顔をくく』なんて声が聞こえた気がするが気のせいだろう…。

十分ほど走り回っただろうか。こういうとき広い家が恨めしくなるがそんなこと言つてられない。

荒い息を吐きながら辺りを見回したとことで中庭にある池のほとりにたたずんでいる母さんを見つけた。

「母さんっ!」

俺の声に振り返った母さんは目元を赤くして無理やりな笑顔を浮かべた。

「シュヴァルツ、さっきはぶつたりしてごめんね。もうおちついたから「母さん」…」

「親父に思いつきり説教されてきたよ。おかげで俺がどれだけ母さんたちを傷つけてきたのか分かった。ほんとにごめんなさい」

そうして頭を下げた後も母さんの固い表情は変わらない。

「ほんとに反省したんだ。それで、親父にも後で言わないとダメなんだけど。母さん、俺を助けてくれませんか？」

これを聞いた母さんの顔は少しだけ固さが取れていた。

第10話

第10話

おう！シュヴァルツ・ド・アールハウトだ！

母さんに謝った後、親父も入れた三人でこれからの事を話し合った。相談の結果、貴族達の思考を変えるために動くにしてもまだ早いということになった。いずれは動くにしても、今は下準備をするべきだろうと言うことで俺は動き回っている。

傭兵ギルドへ行って俺の四極というネームバリューを使って傭兵を集め、情報収集のために働いてもらうことを決めた。それと平行して大きく行動するためには後ろ盾が必要ということで、平民に対して善政を行っている領地の噂をアールハウトの領民から仕入れ、関係の深いヴァリエール公爵に俺達の行動を伝えておいた。

こういうことをしていると時間が過ぎるのは早いもので、あの親子喧嘩からすでに一週間が過ぎて俺の学院へ帰る日になっていた。

「それじゃ親父、母さんとりあえず学院に戻るよ。俺もできることはするつもりだけど、しばらくは傭兵団のこととか色々よろしくね」

「ああ、子供に心配かけるような無様なことはせんよ」

「ふふ、そうね。何かあったら手紙で伝えるわ」

「お願い。それじゃ行って来ます」

「「いってらっしゃい」」

そう言つて馬車へ乗り込んでアールハウト家を後にした。
だがまだ頭の中はこれからのことでいっぱい、そのことを考えているうちに学院へ着いていた。

「二週間程はなれてただけなのに妙に懐かしい気がするな」

そんなことを呟きながら、馬車の中で凝り固まった体を伸ばしていると教室がある建物のほうに砂煙が見えた。
何だあれは？と首をかしげながら眺めているとそれは少しずつこちらに近づいてきているような気がしてきた。

「あ？なんか見覚えのある桃色と赤が見える」

ドドドドという効果音を引き連れて、目の前に鬼が二匹出現した…。

「シュヴァルツ？ずいぶんと遅かったわね？」

「い、いやルイズ…？二週間休みを取ったって言わなかったっけ…？」

「私達に一週間もしたら戻るって言つたのは嘘だったのかしら？」

「へ…？キュ、キュルケ？俺そんなこと言つたか？」

「まさか忘れてたの…？」

そういえば二人を説得するときそんなことを言つたような気も…
なんて考えている間に、走っていたときのドドドドがいつの間にかゴゴゴゴという音に変化して、それに伴って俺に掛かるプレッシャーが増えていく。

このプレッシャーはカリン様にも劣らない…。

「そ、そんなことはだな…」

「「忘れてたのね？」」

「すみません…」

それから一時間経ってやつとのことでお説教から開放された俺は自室のベッドに倒れこんだ。

まさか学院に帰ってきて最初の出来事でここまで体力と気力を減らされるとは思わなかった。なんてことを考えていたら瞼が重くなつて。

「ん…？」

ベッドの上で目を開けた。俺はいつの間にか寝ていたらしい。窓から差し込む明かりは既に茜色でそれなりの時間寝ていたようだ。

寝ぼけ頭でぼーっとしていると俺の腹から”ぐうぐう”となんとも情けない音が、よく考えたら学院で昼食を取る予定がルイズ達の説教で食べ損ねていた。

とは言うもののこの時間だとそろそろ夕食の時間だろうと思った俺は、やることもないので二度寝のために再び目を閉じた。

コンコン

控えめなノックの音が部屋に響いたことで俺の二度寝は終わった。

「シュヴァルツ様いらっしゃいますか？」

シエスタが起こしに来てくれたらしい。できたメイドだ。

「ん、シエスタか？悪い、今起きた。何の用だ？」

「お休みのところ失礼しました。食事の時間になりましたがいかがいたしますか？」

そう声を掛けられて二度寝の前に腹がなったことを思い出した。

「もうそんな時間か。行くよ。起こしてくれて助かった」

「いえ、仕事ですから」

そういうと扉の前にいた気配が遠ざかっていく。どうやらまだ仕事があつたらしい。

手間を掛けてしまったことを申し訳なく思いながら、寝ている間に崩れた服と髪を整えて顔を洗うと部屋を出た。

食堂ではすでに食事が始まっているようで少しの喧騒を聞きながら俺は食堂に足を踏み入れた。

「シュヴァルツ〜」

声のしたほうに振り向くとルイズを先頭にキュルケとタバサがこちらに向かってきているとこだった。

「走らなくても逃げたりしないって」

「シュヴァルツが遅いからよ…。一緒に食べようと思って待ってたんじゃない！」

「そりゃ悪いことした。さっきまで寝てたんだよ」

…若干涙目になって上目遣いで見つめてくるルイズは最強だと思うんだ。

そんなことを考えていたら俺の右手はルイズの頭を撫でていた。むう、俺の右手は意思でも持っているのだろうか…。

「もう！子供じゃないんだからね／＼」

そう言いつつも、顔を赤く染めながら振りほどくこともせずに気持ちよさ気に目を細めるルイズ。

「遅かったじゃないシユヴァルツ。待ってたのよ？」

「悪かったな。ルイズにも言ったんだがさっきまで部屋で寝てたんだ」

「そうだったの。言ってくれば私が起こしに行ってあげたのに」

俺の左腕に筆舌に尽くしがたい幸せな感触が／＼

「あ！ちよつと！キュルケ、離れなさいよ！」

「なあに、ルイズ？あなたじゃこんなことできないから羨ましいのかしら？」

「そ、そんなことないわよ！……私だっていずれは大きくなるわよ。ちい姉様も大きいんだし」

いつもどおりキュルケに噛み付くルイズ。だが怒った後になにやら一人でブツブツと呟き始めた。何を言っているのかよく聞こえないが自分の世界に入ってしまったらしい。少し聞こえたのは「でもエレオノール姉様は……」だ。

エレオノールさんがどうかしたんだろうか？

ルイズをどうしようか悩んでいると右腕を引かれた。ルイズは目の前、キュルケは左側にいるから残りは一人しかない。そっちに顔を向けると案の定、俺の右袖をつまんでいたタバサと目が合った。

「久しぶりだな、タバサ」

「…おかえり」

「あ、私も。おかえり、シュヴァルツ♪」

「そういえば言ってなかったわね。おかえりなさい、ダーリン♪」

ルイズ達に迎えられて改めて戻ってきたんだなという喜びが溢れた。そしてその喜びをくれた三人に俺のできる限りの笑みを向けて

「ああ、ただいま」

第10話（後書き）

描写不足な気がしないでもない

感想等いただけるとありがたいです

明日から専門学校なのでただでも不定期で遅かった更新が更に遅くなるかもしれません。

こんな駄作ですが気長にお付き合いいただければと思います。

第11話（前書き）

いつにもまして会話しかない気がする

まあどうぞ（＊σ・Δ・）σ

第11話

第11話

シュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

ん？『よつ！』とか『おう！』とかはどうしたって？
そう思った奴にいい言葉を教えてやろう。

”
ネ夕切れ
”

覚えておいたほうが良い！

さて、顔なしみの三人に迎えられた後、四人で軽く話しながら食事をはじめた。専ら話題は俺の休暇中のこと、隠し事をするのが嫌だから三人にはほんとのことを話した。もちろん声量には気をつけて。

時々やかすルイズが「韻竜ですつてええええええええええ！！」なんて大声で叫んだりもしたが何とかごまかして再び会話中である。

「気をつけろよルイズ。バレたら一大事なんだから」

「ご、ごめん…。でもいきなりそんなこと言われたら誰だって驚くわよ」

「それはその通りだけど。いきなりあれは無いわね」

「気をつけたほうがいい」

「だから謝ってるじゃない！」

また喧嘩になるのは遠慮願いたいので話題を切り替える。

「で、まあこれが大まかな顛末だな」

「一体何があったのかしら。韻竜がそんなに傷付くなんてただ事じゃないわ」

「確かに気にはなっただがな。クシャスにも聞いたんだが、どうもその辺りの記憶が曖昧らしい。何かに襲われたって記憶はあるのに相手が分からないんだと」

「おかしいこともあるものね。でも韻竜にそれだけの傷を与える相手がいるなんて…」

「……」

ルイズとキュルケと多々ある不可思議なことについて話しているとタバサの声が聞こえないことに気が付いた。口数こそ少ないが、いつも俺達の会話で気になったことに対しては積極的に参加してくるのに。

不思議に思っ て声を掛けようとタバサを見れば…。

「パクパク」

「モグモグ」

「ムシャムシャ」

「ゴクン」

全てタバサから聞こえた音だ。どうも俺を待っていたことで相当空腹だったらしい。あまりの食べっぷりに凝視していると、不意にタバサが俺の方を向いた。

「お？どうした？」

「…」

口に入っている料理で喋れなかったのだろう。モグモグと口を動かして料理を飲み込むと再び俺の方を向いて。

「後ろ」

「は？後ろ？」

振り返ったそこには黒いオーラを放つ桃色とニヤニヤしているキュルケ、ルイズの髪が風もないのになびいている気がする。…俺が疲れているせいで幻覚でも見えているんだろう。そくに違いはない…。

「シュヴァルツ？今度はタバサなの？」

「へ？！いいや、そんなことはだな…」

「あら？私は構わないわよ。だってダーリンは魅力的なもの。しょうがない事だわ」

「ぶっ！何言っただよキュルケ！そもそもタバサがそんなこと言っていないのに」

「…あなたが嫌じゃないなら、私は構わない」

「?!」

驚いたのは俺のみでルイズは放つオーラを増やし、キュルケは更に笑みを深めた。

「な、なんでだ？」

「あなたからイヤリングを貰った時、嬉しかった。そのときから」

「マジかよ…」

「まじ？」

「あゝ、なんと言つかだな。いまいち実感がわかなくて…」

その後黒いオーラを噴出させ続けるルイズを散々宿め、何とか難を逃れた。

タバサは爆弾発言を投下した後、話は終わったとばかりに再び料理を一心不乱に食べ始めた。だが相変わらず無表情なその顔が少しだけ翳っていることに俺は気づいていた。

食事を終えた俺は三人と分かれ自室へと戻った。

部屋を出る数分前まで寝転んでいて、よれていたシーツは既に別のものに敷きかえられ皺一つ無い。

話は変わるが、この世界の生活習慣として、夕食を食べた後はある程度は動くにしても一時間もすれば就寝するのが一般的なわけで。そのため現代のように夜更かしができるような娯楽品は無い。詰まるところ何が言いたいかというところ。

「寝れねえ…」

現在進行形で俺は暇なわけだ…。

昼寝を、あまつさえ二度寝までしてしまったんだから当然といえば当然なんだが…。

なんて後悔しても後の祭り。ということで俺は部屋を抜け夜風にも当たろうと外に出た。

人工的な明かりが殆ど無いこの世界では夜の空＝満天の星空だ。

中庭に出た俺が見たのは、満天の星空に映える赤と青の満月だった。

「今日は満月だったのか…」

二色の光が混ざりあい、紫という幻想的な色をかもし出す中夜の少し冷たい風が俺の頬を撫でる。

その心地良さに思わず芝生に仰向けに倒れこみ、夜空を眺めて少しした頃芝生を踏みしめる音が聞こえ見上げるようにして音の方向を向くと。

「タバサ？こんな時間にどうしたんだ？」

最早トレードマークとなった分厚い本と身長よりも長い杖を持ったタバサがいた。

「窓からあなたを見かけたから。あなたこそどうしてこんな場所に？」

「俺か？俺は昼寝のしすぎで眠れなくてな。ここでノンビリしてたら眠くなるかと思って星を眺めてたんだ」

「そう」

そういつてタバサは俺の隣へ腰を下ろした。

少しの静寂が二人の間に訪れるが以外にもそれを超えたのはタバサのほうだった。

「答え、聞いてない」

「答え？」

「私があなたを好きになつたら、嫌？」

「…嫌じゃない。タバサは十分可愛いしな」

「良かつ「でもな」…え？」

あえて俺はタバサの声にかぶせる様に話を続ける。

「それはタバサが本心から俺の事を好きになつてくれた場合だけだ。なあタバサ。なんであんな嘘ついたんだ？」

「どうして…分かったの？」

「人の気持ちの機微つてのを察するのは割りと得意でね。俺の強さに憧れてる、タバサから伝わってくるのはそんな気持ちだけだったんだ。それにまるで何かをごまかすように料理を食べまくってたしな。今日食べ過ぎただろ？」

「…どうして、あの場で言わなかったの？そうすればルイズから怒られなくてもすんだのに」

「タバサは無闇な嘘をつくタイプじゃないだろ？きつとなにか理由があるんだと思つたから、こうして二人のときに話したほうが良いだろうつて思つたんだ。まさかこんなに早くなるとは思わなかったけどな」

俺の言葉を聞いて俯くタバサ。やっぱりなにやら理由があるらしい。

「別に言いたくないなら無理にいわなくても良い。タバサが伝えたと思つたときに聞くから」

俯いていたタバサは顔を上げ俺を見ながら小さく頭を横に振つた。

「いい。あなたには聞いて欲しい」

そう言つてタバサは話し始めた。

自分は現在のガリア王ジョゼフの兄であるオルレアン公の娘であり、本名をシャルロット・エレーヌ・オルレアンということ。父親であるオルレアン公をジョゼフが殺し、更には自分を殺すために料理に毒を仕込み身代わりとなった母の心まで壊したこと。現在はジョゼフの娘の北花壇騎士団として死と隣り合わせの任務を行うこと。

自分より頭一つ分以上小さいタバサがこんな目にあっていたことを聞いて俺の中でガリア王ジョゼフに沸々と怒りが沸いてくる。

「それをどうして俺に話したんだ？」

「あなたには隠していてもいつかはばれる気がした、それに嘘をついたから。あとイザベラから命令が来た。四極について調べろつて。

私はイザベラ達に逆らうことはできない。だから…もしあなたを殺せと命令が来たら私はやる。そのとき、私を殺してかまわない。ただ、できればその後母様を助けて欲しい」

「……」

「私が言いたかったのはこれだけ…」

淡々と全てを話したタバサは踵を返し、女子棟の方へ帰っていった。

その後姿を見ながら俺はある決意を決めた。

第11話（後書き）

さて、まあ色々思うところがあるかもしれませんが、感想に書いていただければできる限り答えます。

とはいっても作者の俺の設定が既に穴だらけなんですけどねw

ではまた次回（、＊）ノシ バイバイ

第12話

第12話

「ふむ…」

ん？ シュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

俺はこないだのタバサとの一件以来、慌しく動いている。なんだか最近慌しいことが多い気がするがそれだけやることあるんだからしょうがない…。

まあすでに学院が夏休みに入っているので時間はある。

タバサとの一件で俺が決めたとある決意。それはタバサの母さんを助けるならば、タバサ自身も必ず助けてやろうということだ。

仮にタバサの言うとおり、北花壇騎士団としてタバサが俺の命を狙うことになったとして。

それを返り討ちにした後に自分が殺した相手の母親を助けるなんて俺にはできない。

自分の子供を殺された相手に対して、どんな顔して助けになんか行くんだ？俺はそんな相手に屈託の無い笑顔を向けられるほどの演技

力は無い。

用は俺自身の問題なのだ。もちろんこれは俺のエゴに他ならないが、タバサもそのほうが絶対に幸せのはず。なら俺のエゴを押し付けることに躊躇は無い。

そんなわけでタバサ達を助けるために、周囲の状況やタバサの母親の居場所、いっどんな方法で助けるかといった作戦までの助けるための準備を急ピッチで進めている。

今はガリアで傭兵として働きつつ諜報活動を行っている以前俺が集めた傭兵達（四極兵团なんて名前がいつの間にかついていた）が定期的に送ってくる報告書に目を通していたところだ。

ざっと報告書の内容をまとめると

ジョゼフは無能とされている。

オルレアン公は狩りの最中に不幸な事故に合ったことになっている（具体的には知られていない）

タバサの母親はオルレアン公の死で体調を崩されているというのが表向きの理由。

タバサの母親はオルレアンの領地にある城にいる。

多少の差異はあるものの、大体こんなところだ。

オルレアン領の城には特に見張りもなく警備自体は最小限らしいので、救出に関してはまったく問題ないだろう。

だが救出の前に何とかしておかないといけない問題が二つある。

一つ目はタバサの母親の心が壊れてしまっているということ。

タバサの話では自分が持っていた人形をタバサだと思い込んでいて、本当のタバサを拒絶するんだとか。

まずはこれを何とかしないと救出どころか誘拐になってしまう。

二つ目、タバサを含めオルレアン一家は王族だということ。これが一番厄介な問題だ。

下手に痕跡を残すようなことをすればそれこそトリステインとガリアの戦争の火種になりかねない。そんなことになればトリステインの負けは目に見えているだけに慎重に行動することが要求される。

何かタバサ一家をトリステインに移住させてもいいような理由があれば堂々と行けるわけだが、今のところそんな名案は思いついていない。

だが一つ目の問題はわずかだが解決の可能性がある。

あらかじめ報告書を読み終わった俺は一つ目の問題の解決の糸口となるかもしれない奴の元へ行くために学院を出た。

「久しぶりだな、クシャス」

馬車に揺られながら向かったのは以前助けた火韻竜クシャスの元だった。

「ほう、貴様はあの時の。我に何か用か」

「ああ、あの時の借りを返してもらおうと思つてな」

「よかるう、我に何を望む？」

「エルフの知り合いがいるか？いるならそいつと俺を会わせてほしい」

「エルフだと？人間の貴様が何故エルフに会いたがる？エルフとは貴様らの忌み嫌う存在ではないのか？」

「一般の感覚からいえばそうだろうな。けど俺はエルフに対して特に何かを思つたことはない。せいぜい耳が長いとか尖つてるなとかその程度だな」

「…」

突然黙つたクシャスにいぶかしい目を向けているとクシャスは突然笑い始めた

「ククク…フハハハハハハハ…。そう変な目で見るな、まさかそんな人間がいるとは思わなかったただけだ。よかるう、エルフに会わせてやる。我の背に乗るがいい」

そう言いながら元の竜の姿に戻るクシャスの今から行くという予想外の言葉に俺はたじろぐ。

「今から行くのか…？手土産とか何も用意してないんだが…」

「そんなこと気にするような奴ではないわ。もつとも我が背に人間なんぞを乗せてくることに驚いて些細なことなど気にならんだろうがな」

そう言われてしまうと頼んでいる側の俺に断ることは出来ない。フライを唱えて10メートルほどの高さのクシャスの背に乗る。こうして近寄ってみると改めてクシャスの大きさが分かる。高さだけでも10メートル、全長は30メートルを超えるだろう巨体だ。そんな風に

クシャスの大きさに感動しているとクシャスから声が掛かった。

「行くぞ。しっかり捕まっている、落ちても責任は持たん」

そう言うや否や巨大な翼が羽ばたき始めぐんぐんと高度を上げていく。突然巨大な竜が森から現れれば騒ぎになりそうなものだが、その辺に抜かりはない。風魔法で光の偏光角度を操作して町から見ても何も見えないようにしている。

飛び立つてから一分もすれば既に雲の上に達していた。周りの景色がありえない速さで流れていくが俺がそよ風と感じる程度にしか風がない。恐らくクシャスが何かしてくれているのだらうと思い、感謝を込めて力強い鱗を撫でた。

「…何をしている」

「驚いたな。この程度の刺激でも感じ取れるのか」

「我の場合はまだ傷が治って間もないからだ。たとえ普通の場合でも感じ取れただろうがな、今は特別敏感になっている」

「そうか…。悪いな、治りたてで働かせて」

いたわりの言葉を掛けたところで、クシャスが嘗めるなとばかりに体を揺らした。

「人ごときに心配されるほど我は脆弱ではない。…だがまあ、礼ぐらいは言おう」

「悪い悪い、じゃエルフのどこまで一つ頼むぜ」

「任せておけ」

恐ろしく速い空の旅は三十分程度で終わりを告げた。クシャスがゆっくりと下降の体勢に入っただのを感じた俺は、少し出っ張っている

鱗にしがみつく。辺りを見れば一面の砂、どうやらここはサハラと呼ばれる砂漠のどこからしい。そんな砂しかない場所に、家がポツンと一軒だけ建っている。

「その家に我の知るエルフがいる。何をする気が知らんが我を余り待たせるなよ」

「分かった。できるだけ早く済ませてくる」

クシャスから降りて家へと向かう。するとある場所を越えてから突然涼しく感じるほど気温が下がった。どういう技術なのか分からないが、予想を超えるエルフの技術に驚いていると家の扉が開いた。

「ちよつと韻竜！私の家が砂まみれになったじゃないの！どうしてくれるの…よ…？」

憤慨した様子でクシャスに食ってかかることなくルイズと同じ雰囲気を持つ金髪のエルフと目が合った。

「…あんた人間よね？こんなところで何やってるのよ？もしかして…その韻竜に喧嘩でも売ったの？」

俺のエルフとの交渉はまずは弁解からスタートすることとなった。

第12話（後書き）

長い間お待たせして申し訳ないです。

やっぱり文章力ががが…な駄文ではありますが少しでも暇潰しになれば幸いです。

第13話

第13話

「あゝもう！何度言ったら分かるんだよ。俺はクシャスに協力してもらってここまで来たんだっての！」

「だから何度も言わせないで、人間風情が韻竜の背中に乗れる訳無いでしょ！言い訳にしてももう少しましなの考えなさいよ」

現在クシャスに連れて来てもらったエルフの家の中でそのエルフと口論真つ最中のシュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

それにしても何なんだこのエルフは、何度クシャスとの関係を説明しても信じやしない。エルフってのは頭が固いもんなのか…。既にこの口論を始めてから三十分以上が経過している。不毛だ…。

「だゝ！もういい、こんなことしてる場合じゃないんだよ」

「はあ？言い訳だっていうことがばれたからってばぐらかすのね」

「ッ！？…クッソ。そこまで言うならクシャスに直接聞け！それよりも俺には目的があるんだ」

「言われなくてもそうするわよ。それで？目的って何よ。まさかまたシャイターンの門がらみのことじゃないでしょうね。それなら無駄よ、さっさと帰りなさい」

「一々人を小ばかにしたようなことを言うエルフにかなり腹が立つがどうがんばっても俺は頼む側、これ以上の関係悪化は避けなければとなけなしの理性で何とか怒りを押さえ込む。」

「そんなことじゃない。お前精神を壊す薬って知ってるか？恐らくエルフの秘薬のはずだ」

「知ってるからって何だっというの？まさか製法を教えろとか？」

「お前は俺をどんな奴だと…。まあいい、知ってるなら話は早い。その薬で壊れた精神を元に戻す薬は無いか？」

「何？もしかしてあたしにそれを作れっというの？」

「作れるならそうして貰いたい。作れなくても手に入れる方法だけでも教えて貰えれば助かる」

ここで協力が取り付けられないとタバサ救出計画がおじゃんだ。何としても最低限の協力は取り付けなければ。そう考えながら俺はエルフの反応を待った。

「それで？仮にあたしがそれを作ったとして、何の見返りがあるのかしら？」

「…何が欲しい？俺に用意できるものなら用意しよう」

「ふーん、じゃあの韻竜の鱗なんていいかもねえ。ま、出来る訳無いだろうけど」

「クシヤスの…鱗？」

「そ、韻竜の鱗。あれって凄い貴重な物なのよね、一度じっくり研究したいと思ってたの」

「それを渡せば作ってくれるんだな？」

エルフは頷いた後「出来る訳無いでしょうけどね」と言って話は終わったとばかりに席を立った。クシヤスの鱗、もらえるかどうかは分からないがそれしか方法が無い以上やるしかない。

座っていた席を立ち俺はエルフの家を出て、話が終わるのを待っているクシャスの元へ向かった。

「話は終わったか」

「一応な、ただ俺の願いを聞いてもらうためにちょっと条件を付けられてな」

「ほう、それで我の元へ来るということは何か我に関係でもあるようなことか？」

「…クシャスの鱗と引き換えにならやってやるとさ」

「…我の鱗だと？ふん、小娘め大層な物を条件に付けおつて…。まあいい、一枚程度くれてやろう」

「いいのか！？」

俺はクシャスの予想外の返答に思わず聞き返してしまう。てっきりもう借りは返したと無下にあしらわれると思っていた俺の驚きは一人だ。

「貴様は我と我の子供を助けてくれた。たかがエルフの小娘を紹介した程度で、借りを返したつもりになるほど我は恥知らずではない。要らぬと言ふのなら話は別だがな」

「まさか！クシャス恩に着る」

「ふん、恩を感じる必要などない。だがこれでお前への借りは返したぞ」

「ああ、助かった」

クシャスに感謝しながら鱗を取るために近寄るとクシャスから場所を指定された。その鱗を引っ張ると思つた以上に簡単に鱗は取れた。綺麗な紅色のそれは、一見したただけでは何かの宝石かと思うような光沢を放っている。

余りに綺麗な鱗に少し手放すのが惜しくなった気持ちで頭を振って追い払い、俺は再びエルフの家へ戻った。そこでは先ほど座っていた椅子に座り何かの飲み物を飲んでゐるエルフがいた。

「あら、もう戻ってきたのね。それで？諦めは着いたかしら？」

「諦め？何のことだ？これがあれば薬を作ってくれるんだらう？」

若干嫌味も含めて言っただけの言葉は俺の持つ鱗に興味津々のエルフの耳には入らなかったらしい。今までの態度が嘘の様に俺（の持つ鱗）に近寄ってくる。

「嘘でしょ！？これ…本物の韻竜の鱗だわ…。あんた…何者よ」

「来たときからずっと説明し続けてるはずだがな。お前は信じなかったが」

「当たり前でしょ！？人間に従ってる韻竜なんて聞いたこと無いわよ」

「従ってるんじゃないかって借りを返してもらってる「借りでも何でも従ってることに間違いは無いでしょ」む…」

「まあいい、これで作ってもらえるんだな。精神を治す薬を」

「ええ嘘を付くつもりは無いわ。ただその前に」

そう言っただけを見るエルフ。なんだかその目が怪しく光ったような気がするのはいけではないだろう…。

「あたしの名前はルクシャナ。韻竜の鱗も興味深いけど、あんたの方がよっぽど面白そうね。色々聞かせてもらえないかしら？あの韻竜とどうしてこうなったのかとか、あたしの作る薬の使い道とか」

そう言いながらにじり寄って来るエルフはまるで獲物を見つけた豹

のよう……。どうやっても逃げられないと悟った俺は、問題の無い範囲で今までのあらましをルクシヤナというエルフに語った。

「へえ、目つきの割りに友達思いなのね。見かけにはよらないものね」

「久しぶりに目つきのことを言われたな。まあそういうことだ。それでその薬はどのくらいで出来る？」

「そうねえ、めったに作らない薬で材料から集めなきゃいけないし。半年くらいかかるかしら」

「半年か……分かった。半年後にまたここに来る、そのときに薬を頼む」

「分かったわ。それじゃそのナント力ちゃんを助けるのがんばってね」

何とか協力を取り付けることに成功して安堵しながらクシヤスの元へ戻り、再びクシヤスの背に乗って元のラルド村の森まで戻った。クシヤスの上からの眺めで大体の位置は掴んだ。もう借りの無いクシヤスは乗せてくれないだろうが、これで自力でもあそこにたどり着けるだろう。

とりあえずタバサの母親を元に戻す目処は立った。タバサ救出作戦の決行は半年後、俺が学院の二年生になって一カ月後だ。この時点で準備を完璧に済ませておかなければいけない。そう決意を新たに俺はクシヤスの元を後にした。

第13話（後書き）

ゼロ魔を読んだのが結構前なものでルクシャナの感じがまったく分かりませんorz

キャラ崩壊を起こしているでしょうがどうか生暖かい目で見てやってください…

そして調子に乗って今日2回目の投稿w

追記ご指摘頂きましたので修正しました。
聖地↓シャイターンの門

第14話

第14話

ルクシャナというエルフに出会い、薬の約束を取り付けてから三ヶ月。タバサ救出作戦のために忙しい日々を送ってるシュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

タバサを救う方法については既に問題が無いところまでこぎつけた。もちろんジョゼフ達の動向がいまいち掴めてない以上完璧とはいえないが、それでもうまく行きさえすれば問題は無いはずだ。

さて、その方法についてなのだが少し問題というか何というか…。まあそういうものがある訳だ。それを何とかするために俺は学院の自室にルイズとキュルケ、そして当事者であるタバサを呼んでいる。かなり言いづらい事だが俺の頭じゃこれ以上に良い方法が思いつかなかったのだからしょうがない。

俺がこれからしなければならぬ事を思うと逃げ出したくなるが、そういうわけには行かない。そうして部屋で十分程待つとドアをノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

「お邪魔するわよダーリン」

「お邪魔するわねシュヴァルツ」

「お邪魔する」

三人に適当に椅子を勧め、時間を見計らって用意していた紅茶を渡すと俺は覚悟を決めて本題を切り出した。

「さて、みんなを俺の部屋に呼んだのはこの三ヶ月弱、俺が忙しくしてた理由を話そうと思ったからだ。その上で、虫のいい話だとは思っただけどみんなに協力して欲しいことがある」

「そう、やっとな話してくれるのね？ダーリンったら何回聞いてもはぐらかすんだもの、少しショックだったのよ」

「キュルケの言うとおりよシュヴァルツ。もっと早く話して欲しかったわ」

「……」

「ごめん、どうしても慎重に進めないといけないことでさ、できるだけ秘密にしてたんだ。ほんとに悪かった」

ルイズとキュルケにはこの三ヶ月何度も何をしているのか聞かれその度にはぐらかして逃げていた。俺の身の回りのどこにジヨゼフの目があるか分からなかったとはいえ、信賴している二人に秘密にしなければならなかったのは心苦しかった。

「それで、こんな風に改まって話すってことは大変なことなのね？この三ヶ月貴方は何をしてたの？」

「ああ、それはタバサのことなんだ」

タバサの体がビクリと強張るのを感じた。俺はまだこの作戦のことをタバサにも伝えていないのだから当然だろう。だがそれでも話を続ける。

「キュルケはなんとなく勘付いてるんじゃないかと思うけど、タバサは実はガリアの王家の人間だ」

ルイズは驚いてタバサを見つめているが、想像したとおりキュルケはなんとなく気づいていたようで謎が解けたような顔で頷いていた。

「でだ、実はタバサは…」

俺はタバサの境遇をキュルケとルイズに話していった。その間タバサは口を挟むことも渡した紅茶に手をつけることもせずただ体を強張らせてじっと何かに耐えているようだった。

「タバサにそんなことが…」

「タバサ…」

話し終えた頃には部屋の中を重い空気が包んでいた。それほどタバサの境遇は驚くべきものであり、シヨックを二人に与えていたということだろう。

「俺は三ヶ月前にこの話を聞かされたんだ。もし俺をタバサが襲うことになった時は返り討ちにして欲しいなんて言葉付きでな。でも俺はタバサを殺すことなんて出来ない。どうしてもタバサを助けてやりたかった。だから俺はこの三ヶ月、タバサを助けるために色々やってたって訳だ」

「やっぱりシュヴァルツは優しいわね…」

「とりあえずダーリンのやってた事は理解したわ。それで私達にやって欲しいことって何なの？タバサのためですもの、私に出来ることならなんだって協力するわ」

さて、ここまでは前振りに過ぎない。これから話す内容が本題だ。
改めて気を入れなおし俺は話を続けた。

「二人に協力して欲しいことって言うのは…少し違うな、二人に納得して欲しいことが」

「納得？タバサを助けることに納得しないわけ無いじゃない」

「いや、タバサを助けるための方法を色々考えたんだけどな。どうしてもこれしか思いつかなくて…」

「どういうことなの？はつきり言ってくれないと分からないわよダーリン？」

タバサの方がどうしても気になってしまいがしょうがないことだろう。俺が言おうとしていることは…。

「まだタバサの了解を得て無いからなんとも言えないが…、俺はタバサと結婚しようと思う」

室内が一瞬沈黙に包まれたが、今まで一言も発さなかったタバサの一言でそれはあっけなく崩れる。

「…どう…いう…こと？」

「事前に了解を取らなかったことは謝る。けどこれがタバサのお母さんを助けるのに一番安全な方法なんだ」

そこまで言い切ったところで俺はこれまで感じたことの無い重圧を感じた。余りの迫力に冷や汗が止まらない。その重圧を放つ二人はニツコリと笑顔でこう言った。

「「詳しく教えて貰うわよシュヴァルツ（ダーリン）」」
「も、もちろんだ。全部キチンと説明する」

俺が若干どもったのは大目に見てほしい…。

そこから俺は作戦の全貌を三人に話した。特に当事者であるタバサにはこの作戦を理解しておいてもらわなければいけない。俺が作戦の全てを話し終わる頃にはルイズ達を呼んでから二時間程経過していた。

「…というわけなんだ」

「要約すると、シュヴァルツがタバサと結婚することでタバサのお母さんをトリステインに呼んで、頼みである精神を戻す薬を飲ませてちゃんと治した上で」

「ダーリンの領地に住んでもらうことでタバサ達の安全を守る。そういうことなのね」

「そういうことだ。だからまずはタバサに俺との結婚を認めて貰いたい。さすがにこればかりは同意をもらわないと無理やりって訳にも行かないからな。もちろんフリをして貰うだけで構わない。どうだ、タバサ？」

そう言つて再び黙つて話を聞いているだけだったタバサの方を見る。タバサも俺のことを見ていたようで目が合うが、その表情は何故か分からないという疑問の表情だった。

「どう…して？」

「ん？」

「どうして…。シュヴァルツはどうして私にそこまでしてくれるの？私はシュヴァルツに何もしてあげてないのに…。私がガリアの王家だから？」

「…タバサが友達だから、じゃ理由にならないか？」

「ッ！？」

タバサが驚いたように俺を見る。

「タバサが友達だから、友達が困っているから助けたい。それが理由じゃダメか？タバサは今までよくがんばったんだ。もう幸せになっても良いだろ？そして俺にはタバサを幸せにしてやれるだけの力があつた。ならやることは一つだろ？」

俺は立ち上がるとゆっくりとタバサの方へ近づいていく。そして今まで以上に小さく感じるタバサを抱きしめて続ける。

「今までよく一人で頑張ったな。だからもう誰かを頼れ。お前は一人じゃないよタバサ。ルイズだって、キュルケだって、もちろん俺もタバサの友達だろ？だからもう一人で全部背負い込むな」

抱きしめた小さな体が小刻みに震え、俺の部屋に小さな嗚咽だけが響いた。

十分程して少し目元を赤くしたタバサにもう一度聞く。

「俺と結婚してくれるか？」

言葉こそ返ってこなかったが、恥ずかしそうにタバサは頷いた。

「ちょっとシユヴァルツ……？途中から私達がいること忘れてないかしら？」

「い！？い、いやルイズ決してそんなことはだな……」

「ダーリン？今回は仕方が無いからタバサに譲るけど……全部終わったら私にも告白してくれるんでしょう？」

「あ！？ずるいわよキュルケ！もちろん私にもしてくれらるんではしょ

シュヴァルツ？」

「ちょ、二人とも落ち着いて!？」

「目の前で結婚宣言されて落ち着けるわけ無いでしょ!?! シュヴァルツがちゃんと答えてくれるまで逃がさないんだから!」

「その通りよダーリン。こればかりは譲れないわ」

二人に追い掛け回されながら、ふとタバサの方を見たときにタバサが浮かべていた笑顔を見て俺は思った。

ああ、がんばってよかったと…。

「この期に及んでタバサを見つめるなんてそんなにタバサが好きなの!？」

「ッ!?! もしかしてシュヴァルツって小さい方が…? いいわ! 私が大きいことの良さを教えてあげるんだから!」

そう思ったのもつかの間、俺は暴走を始めた二人から逃げるために部屋を飛び出した。

第14話（後書き）

個人的に気になるのでここを借りて質問を2つ

？ハーレムに入りたいキャラは誰ですか？

？アンリエッタをハーレム入りさせるか否か

感想にて意見お待ちしてます

第15話

第15話

よう、シュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

今俺は馬に乗ってラルド村への道を進んでいる。理由は母さんから送られてきた一通の手紙だった。

『シュヴァルツ元気にしているかしら？あなたのお友達を助けるための準備はほぼ完璧になったわ。ただ今回はこのことを伝えるために手紙を出したわけではないの。ついにクシャスさんがラルド村を離れるらしいの。クシャスさんもあなたに何か話したいことがあるみたいだから、あなたの事を待ってくれるらしいわ。出来るだけ早くクシャスさんの下へ向かいなさい』

この手紙に目を通した俺はまたも学院に休暇願いを出してラルド村へ向かっているというわけだ。休暇願いに関してはどうやら教える必要が欠片も無い俺を学院も持て余しているようで簡単に通る。というか先生によっては、駄目だしみたいなのをしているから嫌われているだけかもしれない。

閑話休題

そんなわけで馬でラルド村を目指しているわけだ。馬車でもいいか
と考えたが、いくら待って貰えるといってもクシャスの事だ。待た
せなければ飛び立ってしまうだろう。そう思った俺は馬に無理をさ
せない程度に急いでラルド村へと向かった。

道中、クシャスと出会った頃の思い出を懐かしむように思い出して
いる間にラルド村に到着した俺は早速クシャスがいるはずの森の中
へ歩を進めた。

「思ったより早かったな。もう少し掛かると思っていたが」

「あんまり遅くなるとクシャスは待ってくれないだろ？」

「ふっ、よく分かっているな人間」

「まあな。なんだかんだ言って結構長い付き合いだしこのくらいは
分かるようになる」

少し胸を張って自慢げに言ってやるとクシャスの笑い声が聞こえた。

「クツクツク。確かに思えば長い付き合いになったものだ。まあ貴
様はなにやら忙しそうにしていることが多かったが」

「最近妙にやる事が多くてな。クシャスとしちゃ俺みたいな人間
にあんまり関わられなくてむしろよかったんじゃないか？」

「…その通りだ。我としても体を癒すことに専念できた」

返答までの微妙な間が少し気になったが、それよりも大きな違和感
を感じた俺は辺りを見回した。

「あれ？クシャスの子供は？」

「あれか。あれももう一人前になった。お前が来る少し前に独り立
ちして行ったわ。そしてあれからの伝言だ、『助けて貰ったことは
忘れない。早く一人前になって恩返しできるようにする』だそうだ」

「へえ、あんまり関われなかったけどあの子も俺に恩とか感じてたんだ。俺としちゃもうクシャスにかなり助けて貰ったからチャラでいいと思ってたんだけど」

「それとこれとは別なようだ。せいぜいあれの恩返しとやらに期待しておくことだ」

クシャスの子供からの恩返し、何をしてくれるのか気になるところだが、それはそのときのお楽しみという奴だろう。そんな感じで軽い雑談を続けていたが話がふと途切れてしまった。

「さて、あれの伝言も伝えた。そろそろ我は行くぞ、我が頼んだ訳ではないが礼は言っておこう。世話になった」

「それはお互い様だろ。俺もクシャスのお陰で友達を助けることが出来る。ありがとう」

「…ふん、どうも貴様とはまた会うような予感がするな」

「クシャスの勘って奴か？」

「どうだかな。まあ仮に出会ったとしてもそれでどうということは無いがな」

にべも無いクシャスの一言に少しへこみながら俺は少し残念に思っていることを言ってみた。

「そういえば、結局俺のこと名前で呼んでくれなかったな。それが少し残念だ」

「ふん、人間の貴様が我の前にこうして立っているだけで十分な奇跡だ。我が人間ごときの名前を呼ぶ等ありえんことだな」

「クシャスのことだからそう言うとは思ってたけど、残念なことに変わりはないな。もし次に会った時は俺の名前を呼んで貰えるように頑張りますかね」

そう言つと俺もクシャスも言葉を発しなくなり少しの間静寂が森を包んだ。そこから先に口を開いたのはクシャスだった。

「では、我は行く。その友達とやらのために頑張るのだな。我も手を貸しておるのだ失敗した等とふざけた事を聞いたら貴様を燃やしにいくから覚悟するのだな」

「了解。肝に銘じておくよ。それじゃ元気でな」

「貴様に心配されるまでも無いわ。ではな」

そういつてクシャスの巨大な翼が羽ばたき始める。近くにいるせいで吹き付ける猛烈な風を、魔法を使って相殺しながら飛び上がっていく巨大な姿を忘れないように目に焼き付ける。そうしてクシャスがかかり小さくなった頃に頭の中に直接声が響いた。

『我が降りた場所がここで良かったと本心から思う。それも貴様がいたからだ。ではな、”シュヴァルツ”』

その言葉を最後にどんどん遠ざかっていく影を見ながら、俺はクシャスの勘が当たれば良いのと思った。

このときの俺は思った以上に早くその願いが現実になることなど知る由も無かった。

第15話（後書き）

妙に筆が進みますw昨日と同じで二度目の更新w

あれですね。感想をいただくと凄い励みになります。

感想内に提案を載せて頂いてる方が多いのも嬉しい限りです。とても参考にさせて貰っています。

これからも応援していただけるとありがたいです。

第16話（前書き）

途中からかなりハイスピードですがやっと原作スタートの時間軸までたどり着きました。

第16話

第16話

トリステイン魔法学院の生徒全員が講堂に集まりながらも、誰も口を開かず厳粛な空気が辺りを満たす。そんな中オールド・オスマンが立ち上がり講堂の舞台の中心へと向かう。

どうも、進級式真つ最中のシュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

長いようで短かった第一学年を終え、俺達は無事第二学年へと進級することとなった。この恒例行事である進級式を終えた後は第二学年になって始めての授業、サモンサーヴァントを行うことになっている。正確にはこのサモンサーヴァントが終わってから正式に第二学年になるわけだが、今まで失敗した人は一人もいないらしいのでほとんど進級してしまつたようなものだ。

俺はといえばどんな使い魔が召喚されるのかを楽しみにしつつも、ついにタバサ救出作戦決行まで一ヶ月を切つたことを再認識していった。作戦に関する準備は完璧。王族との結婚で発生するであろう柵しからみもある程度なら何とかなるだけの用意はした。あとはルクシヤナに頼んである薬の完成を待つだけである。そんな事を考えながら退屈な進級式を過ごしていると誰かに腕を小突かれた。

「ちょっとシュヴァルツ？いつまでここにいる気なの？みんなサモンサーヴァントのために中庭に向かったわよ？」

「あ…？げ、もう進級式終わったのか。ボーっとしてた…」

「もう、これから一生付き合っていく使い魔を召喚するのよ？しっかりしてよ」

「ごめんごめん。遂に一ヶ月切ったんだなって考えてたんだよ」

「あんまり心配してもしようがないわ。やれることはやっただし、あれだけ頑張ったんだから失敗するわけ無いわよ」

ルイズの励ましに少し心が軽くなる。俺のやろうとしていることは国際問題に発展する可能性も秘めているような事だ。その責任の大きさから不安になっていたが、ルイズの言う通り考えてもしょうがないことだと気持ちを切り替えた。

「よっし。待たせて悪かったなルイズ。俺達も中庭に行こうぜ？」

「あ、ちょっと。行こうぜって言うておいて置いて行かないでよ。」

シュヴァルツ」

ルイズと話しながら中庭へ行くとそこには既に新たに第二学年になった生徒が集まっており、コルベール先生がサモンサーヴァントの説明を始めていた。

「いいですか？サモンサーヴァントとはあなた達の一生の友となる使い魔を召喚する神聖な儀式です。とは言っても緊張する必要はありません。きちんとスペルを唱えれば自ずとあなた達に合った使い魔が召喚されるはずです。どのような使い魔が召喚されるかは分かりませんが、私も楽しみにしております。では始めましょうか。まずはその君から」

そのコルベール先生の一言でサモンサーヴァントが始まった。一人

ずつ地面に描かれた魔法陣の上に立つとコモンスペルであるサモンサーヴァントのスペルを唱えていく。出てくる使い魔はコウモリに黒猫、カエルやでかいモグラ等多種多様だ。

こんな感じで召喚されるのかと感心していたところでキュルケの名前が呼ばれた。キュルケは堂々と魔法陣の上まで歩いていくとスペルの詠唱を始める。

「我が名、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーの名において命ずる。我が友となるべき存在を我が眼前に召喚せよ。サモンサーヴァント！」

スペルを唱えきったキュルケの足元には赤い色をしたトカゲが現れていた。大きさは頭から尻尾までで大人と同じくらい、尻尾には炎が灯っている。

召喚を終えたキュルケがこっちに向かって歩いてくると入れ替わりにタバサが魔法陣へ歩いていった。

「見て見てダーリン！この子火竜山脈に生息するサラマンダーよ！これだけ大きい子初めて見るわ。微熱の二つ名を持つあたしに相應しい使い魔だと思わない？」

「確かに。さすがだよキュルケ。お、タバサの召喚も始まるみたいだぞ」

魔法陣の上に立つタバサ、どうやら口が動いているようなのでスペルの詠唱を始めたようだ。タバサの口の動きが止まって現れたのは

「ちょ！？あれって風竜じゃないの！？」

…タバサは規格外だな。まさか竜を召喚するなんて…。周りの生徒達はざわざわと騒ぎ出しているし、コルベール先生もかなり驚いた

表情だ。

「あー、皆さん。驚く気持ちも分かりますが静かにしてください。
さて、次はミス・ヴァリエール。あなたの番ですよ」

タバサの次はルイズの番なのかと、隣にいるルイズを見れば傍から
見ても分かるくらいに緊張してしまっている。少しでもその緊張を
和らげてやろうと俺はルイズの頭を少し乱暴に撫でた。

「ほら、ルイズ。呼ばれてるぞ？大丈夫、お前なら良い使い魔を召
喚できるさ。心配せずに言って来い」

「ダーリンの言うとおりのよ。あたしとダーリンのお墨付きなんだか
ら堂々としてきなさいよ」

「シュヴァルツ…キウルケ…。分かった！行ってくるわ！見てなさ
いキウルケ。あんたよりも凄いい使い魔を召喚してやるんだから！」
「ちよつと！？励ましてあげたのにそれは無いんじゃないの！？」

思わず叫ぶキウルケに少し頬を赤くしたルイズがそっぽを向きなが
ら言う。

「冗談よ。一応…感謝してるわ。もちろんシュヴァルツにも」

「おう、行って来い」

「もう、正直じゃないわねえ」

いつの間にか戻ってきていたタバサとキウルケと共に魔法陣へ向か
うルイズの後姿を見守る。魔法陣の上へ立ったルイズは杖を取り出
しスペルを詠唱し始める。

「我が名、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリ
エールの名において命ずる。我が一生を共に過ごすに相応しき存在

を我が眼前に召喚せよ！サモンサーヴァント！」

ルイズが言い終わると同時に、俺の視界に変なものが映る。何かと
思っ て見てみればそれは銀の鏡のようなものだった。だがそれは空
中に浮いているようで、さらには波紋が立っている。何か分からな
い物の出現に近く、のキュルケたちに尋ねる。

「なあキュルケにタバサ。これいったいなんだと思う？」

「なにつて…？ どれのこと？ 何も無いじゃない」

キュルケの言葉に疑問を抱きながらも中に浮く鏡を指差しながら再
度尋ねる。

「これだつてこれ！ ってうおっ！？ 指が吸い込まれて！？ 抜けねえ
！」

「ちょ！？ いきなりどうしたのよシュヴァルツ！？」

「いや、俺にも分から…クッソ！ 吸い込まれる！？」

突如出現した鏡に吸い込まれ、一瞬浮遊感を感じたところで目を開
けると目の前にはルイズの姿が。

「…え？ なんでシュヴァルツがここにいるのよ？」

「いやそれが俺にもさっぱり…。いきなり現れた鏡みたいな奴に吸
い込まれたと思ったら目の前にルイズがいたんだよ」

なにが起こったのかまったくわからない俺とルイズは思わず顔を見
合わせ首をかしげた。

「ふむ…。どうやらミス・ヴァリエールのサモンサーヴァントでミ
スタ・アールハウトが召喚されてしまったようですね。興味深い…」

「……すいませんコルベール先生。それってつまりどういう……？」

「要するにミス・ヴァリエールの使い魔はミスタ・アールハウトと
いうことです」

[illegible]

俺とルイズの驚愕の絶叫が中庭に木霊した。

第17話

第17話

[illegible]

どおも、絶賛絶叫中のシュヴァルツ・ド・アールハウトだ。

どうやら俺はルイズの使い魔として召喚されてしまったらしいのだが、いきなりそんなこと言われても信じれるわけが無い。自分の身に起きた不可思議なことで今の現状を客観的に見れば事実だと言うことが分かるが、今の俺にそこまで冷静に考える余裕は無かった。

「コ、コルベール先生。私がシュヴァルツを召喚しちゃったって……
そんなことがあるんですか!？」

「私も聞いたことがあります、現状を鑑みるにそういうこともあるでしょう。なんにしてもミスタ・アールハウトが召喚されたことは確かです」

「…マジかよ。まさかの展開だ」

使い魔の召喚に心を躍らせていたのに、まさか自分が召喚される側になるなんて夢にも思わなかった。まあ不幸中の幸いと言うべきか、主人がルイズだったのは僥倖だった。これがどこぞの——例え

ばヴィリエとか——貴族なんかに召喚されてしまったら…ほんとにルイズでよかった。

「…ごめんなさい、シュヴァルツ…」

難しい顔で最悪の想像をしていた俺を見て、困っていると勘違いしたルイズが謝って来る。最初驚きはしたが困っているわけでも怒っているわけでも無い俺はルイズの勘違いを訂正するために話しかける。

「あゝ、大丈夫だって。確かに最初は驚いたけど別に困ったりはしてないから。むしろ俺を召喚したのがルイズで良かったと思ってるんだぜ？な、ご主人様？」

「ノノノシュヴァルツ」

「えゝ、お邪魔して悪いのですが。話がついたのなら契約をして頂けませんか？まだミスタ・アールハウトも召喚していませんし」

せつかく良い雰囲気だったのに、空気を読めないコルベール先生が話しかけてくる。少しイラッと来たが俺も早く使い魔を召喚したかったので契約をしようとしたところであることに気づく。ルイズも同じことに思い至ったようで顔を赤くしている。

「あの先生…契約ってことはその…」

「もちろん口付けを交わすことですよ？」

「う…ノノノ」

きつと俺の顔ははつきり分かるくらいに赤く染まっているだろう。というか生徒がこれだけ集まっている中でキスとかどんな罰ゲームだ…。周囲からも女子のキャーともてはやするような声と男子からの恨みのこもった視線が俺達（視線は主に俺）に注がれる。どうしよ

うかと悩んでいる間にルイズの方が動き出した。

「シュ、シュヴァルツ／＼こ、これはしょうがないことなのよ／＼」

「い！？ちよ、さすがにここじゃまずいつて！？」

「……嫌…なの？」

…涙目&上目づかいで見られたら拒否なんて出来るわけが無いと思わないか？だから俺は

「ンンツ！？」

自分からルイズの唇を奪った。

すると俺の右手が輝き始めルーンが刻まれ始めると同時に焼けるような痛みが右手に走る。思わずルイズと距離を取って痛みに呻いた。

「ぐっ！？くあっ！くうう…」

「ほう…、あっ！大丈夫シュヴァルツ！？」

「ルーンが刻まれているんです。少しの間我慢してください」

ルイズに抱きしめられながら痛みに耐えていると、数秒で痛みは治まった。

「はあ…。ルイズ、もう大丈夫だ。ありがとな」

「もう大丈夫なのね、よかったあ…。ツ！／＼／」

俺の言葉に安心した表情を見せていたルイズが突然顔を赤くして顔を背けた。それを見て俺も先ほどしかした俺の暴挙を思い出した。自分でも顔が赤くなっていくのが分かる。そんな中相変わらず空気の読めないコルベール先生が俺のルーンが刻まれた右手を覗き込む。

「ふむ？見たことの無いルーンですね。後で資料を調べるとしましょう。さて、恥ずかしいのも分かりますが次はミスタ・アールハウトの番です。ミス・ヴァリエール、下がってください」

「は、はい／＼／」

ルイズは顔を赤くしたままキュルケ達が居る方へと歩いていった。ハハハ、さっきの今で未だ落ち着かない心臓をなんとか落ち着かせながら立ち上がる。まだ少し右手に痛みの余韻が残っているが影響が出るほどではない。気を取り直した俺は目を閉じ、杖を構えて精神を集中させる。

「我が名、シュヴァルツ・ド・アールハウトの名において命ず。我が友であり、家族であり、戦友となるべき存在を我が眼前に召喚せよ。サモンサーヴァント」

スペルを唱え終わった俺が目を開けると、そこには見覚えのある真紅の姿が。

「……………ハッ！？こ、これは一体…。色は火竜ですがこの大きさは…？まさか絶滅したとされていた韻竜…？いや、まさかそんなはずは…？」

隣でコルベール先生がブツブツと何か呟いているがそれは俺の耳には入らない。ついこの間別れたはずの姿が目の前にいるのだから。

『まさか、これほど早くまた貴様と会うとはな。シュヴァルツ』

頭に響く懐かしい声に思わず顔が綻んだ。

「お前の勘、よく当たるみたいだな…。久しぶりクシャス」

「久しぶりと言うにも少し早い気がするがな。まあいい、どうやら我を呼んだのは貴様らしいな。どうやって呼んだかは知らんが、小ざかしい魔法が我に干渉しようとしているようだ」

「干渉って…。使い魔を召喚する魔法だったんだけど、まだ掛かってないのか？」

「ふん、呼び出しに応じてやっただけだ。この程度の魔法など我には掛からぬ」

魔法が掛からないなんてことがあるのかと驚きの事実には呆然とする俺にクシャスが続ける。

「使い魔…か。我は人の下に付く気などない。だが、シュヴァルツ貴様だけは特別だ。我を使い魔とすること、あえて受けてやろう」

「！！俺の使い魔になってくれるのか！？俺はてつきりまたどこかに飛んでいくのかと…」

「だが、心しておけ。貴様が我の主人に相応しく無くなればこんな魔法など吹き飛ばして貴様の元を去ることをな」

「分かった…。これからよろしく頼むぜ、クシャス」

そう言っただけ俺は頭を下げたクシャスと契約の口付けを交わした。

こうしてサモンサーヴァントの儀式は終了したわけだが。色々と波乱を呼んだ今回のサモンサーヴァントの中心に居た俺に関しての、様々な噂や憶測が飛び交い、それを何とかするために学院中を駆けずり回ることになるのはまた別の話。

第17話（後書き）

少し難産でした。ちょっと描写不足な気がするので後日加筆するかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1166r/>

これが俺の貴族道

2011年8月22日06時00分発行